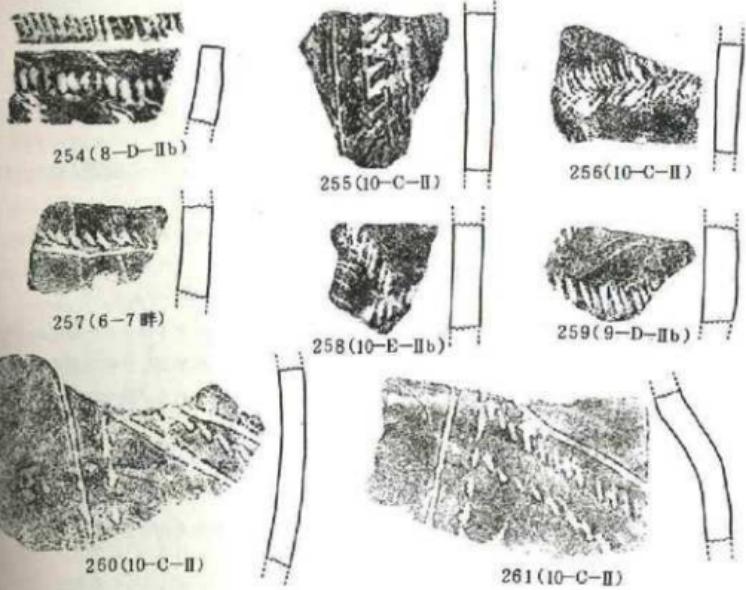


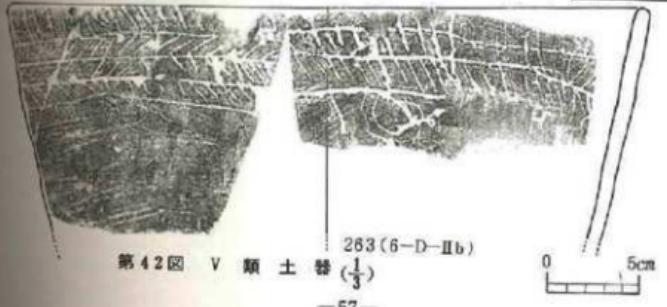
第40図

III類・IV類土巣(1/2)



第41図 N類・V類土器 ($\frac{1}{2}$)

0 5cm



第42図 V類土器 ($\frac{1}{3}$)

0 5cm

くに $1.5\text{ cm} \times 1.3\text{ cm}$ の外方から穿孔した円孔がみられる。

V類土器 (251～261)

ヘラ状施文具で、口唇部と器面に連続の棘突文を施したものである。口縁部 (251～254) と胴部 (255～261) 破片が出土している。

251～254は、口縁部破片である。口縁部器形は、わずかに内寄し端部は平坦面をもつ。整形は、外面にナデ状の調整がみられ内面はヘラ削りで若干あらい。口径は、251が 10.5 cm 、252が 11 cm と小型のものであるが、253は、 16 cm と比較的大きいものである。

施文は、口縁部に沿って棘突文が2列1組で横位に施され、そして下位には、縦位および斜位に2列1組の棘突文が施されている。また、254は、内面の口唇部近くに棘突文が施されている。色調は、黒褐色を呈しているがわずかに赤褐色の部分もみられる。胎土には、長石を多く含みあらい。焼成は、良好である。

255～261は、胴部破片である。施文は、口縁部同様ヘラ状棘突文が施されているが、256のように、羽状に施した棘突文もみられる。

また、255、257、260、261は、棘突文と沈線文を組み合せたものである。

V類土器 (262～263)

沈線で施文を施すもので、262は、直線と曲線を組み合せた文様であり、263は、曲線の文様である。器形は、いずれも内寄ぎみで口縁がひろがるものである。262は、口縁径 26 cm 、263は、口縁径 34 cm を計る比較的大型のものである。

262は、内寄する器形であり器厚は口縁部でわずかに薄くなる。口唇部は、丸味をもって終る。文様は、口縁部外側に沈線で3重の孤線が施されており、この文様が口縁に沿って連続するものと考えられる。器面の調整は、内外面ともうすい条痕整形がみられる。色調は、黒褐色を呈する。胎土には、石英・長石粒と雲母が観察される。

263は、口縁部へ直線的にひろがる器形である。器厚は、 0.9 cm で均厚である。口唇部には不規則なキザミ目を施している。口縁外側には、4条の沈線を施し、その間に斜めの沈線を刻し綾杉文を表現している。(1破片の中には、3条の沈線文間に斜めの沈線を刻む部分もみられる。) 沈線は、比較的粗雑である。綾杉沈線文帯の下端には、2条の孤線が間隔をもって施され、孤線間に、不規則な沈線文様が描かれている。色調は、黒褐色を呈し、胎土には、石英・長石粒が観察される。器面には、薄い条痕調整がみられる。

VI類土器 (264～290)

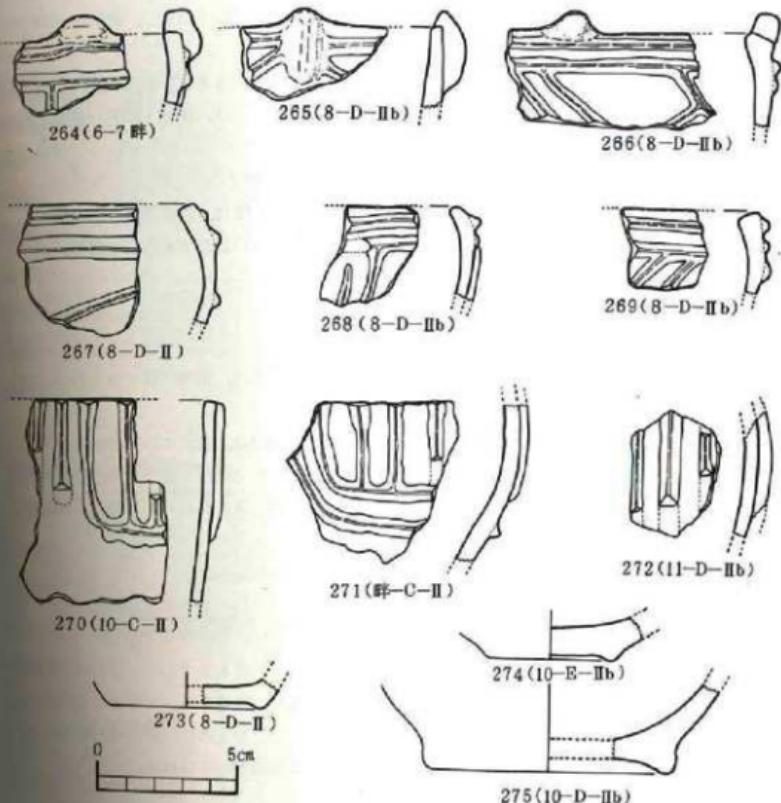
口縁部および頸部付近に、突帯文を貼付したものである。器形および突帯文の形において若干の相違がみられるので、次のように細分して記述することにする。

a) 264～275

器形および突帯に特徴がみられ。器厚も薄く華麗な土器である。264～275までを同類としたが、さらに、264～269と270～272とに細分される。

<264～269>

器形は、口縁部が内彎し口唇部が平坦で内傾する傾向がみられる。器厚は、0.3cm～0.4cmと薄く、口唇部でわずかに肥厚する。内外ともていねいなナデ調整である。色調は、灰褐色を



第43図 VI類土器(1)($\frac{1}{2}$)

呈し、胎土には、長石が若干観察される。焼成は、良好である。施文は、口縁部に沿って2本1組の横位の突帯が貼付され、その下端には、菱形をつくる斜めの突帯が接合される。この突帯も2本が1組である。264～266の口縁部には、口唇部上方から口縁部外面に伸びるコブ状の突起がつけられている。

<270～272>

器形は、胴部において彎曲し口縁部は直口している。270～272は、同一個体と考えられ。前者は、タイプを若干異にする。施文は、口唇部から胴部に継位に伸びる4本以上の突帯が貼付されている。そのうちの2本の突帯が口唇部下4.5cm付近で彎曲して横走し、継位の突帯と接合して文様をつくるものである。

この土器は、胎土に滑石を含み光沢がみられる。内面は、ヘラ削りで若干あらい。外面は、ヘラ削りの後、ナデ整形がみられる。色調は、黒褐色を呈し胎土には、滑石・長石が観察される。焼成は、良好である。

<底部 273～275>

胎土・焼成・色調から、同一形態と考えられるものである。273は、底部径5.5cmを計り、上げ底である。274、275は、丸底に粘土を貼り付けた上げ底状の底部である。色調は、いずれも灰黄色を呈し、胎土には、石英長石粒が観察される。

b) 276～280

口縁部に、1本または2本の突帯を貼り付けるもので、突帯には、頂部に波がみられる。突帯断面をみると、上方に彎曲しているのが特徴である。

276は、口縁部に沿って1本の突帯が貼付されているが、突帯は、波状に貼付されている。器形は、胴部で彎曲をもち口縁部でひらく。口縁径は、30cmを計る大形の壺である。器面には、内外ともに継・横位の条痕整形がみられる。278・280も同型と考えられる。色調は、黒褐色を呈し、胎土には、長石が観察される。

また、277や279のように2本の突帯を貼付しているものもみられる。

c) 283・284・288

口縁部に沿って、2本および4本の並行する突帯を巡らしているものである。器形は、胴部にわずかに彎曲がみられるが、直口して口縁に至る。口唇部は、丸味をもって終る。口縁径は、25cm(283)と23.6cm(284)を計る。色調は、黒褐色を呈し、胎土には、長石粒が観察される。内面は、横位の貝殻条痕で整形され、外面は、継位の条痕調整がみられる。

d) 286～289

口縁部は、わずかにひらきながら直口するもので、口唇部は、わずかに平坦面をもつ。器形は、ほぼcと同型と考えられるが、突帯頂部に連点文が施されている。整形は、内面は貝殻条

2本
の突
き状

れ。
が貼
帶と

は、
され

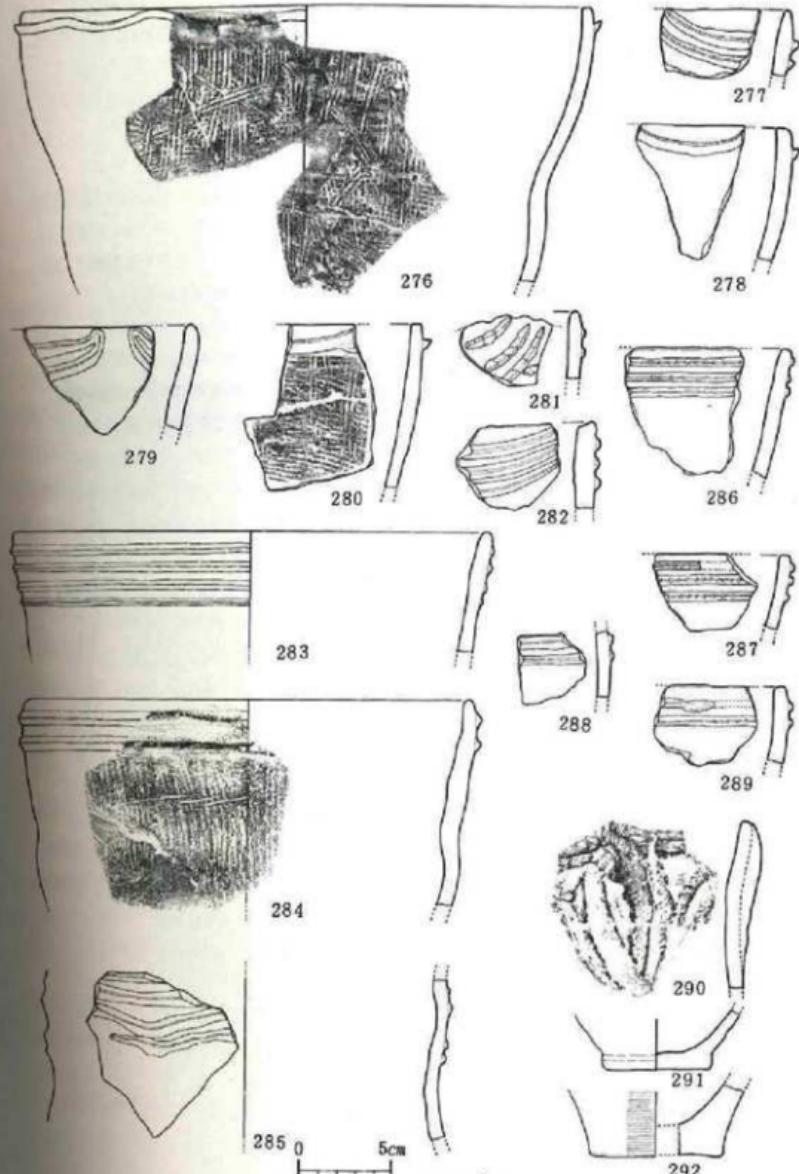
けり。
いす

る。突

いる。
面には、
黒褐色

、脚部
縫合は、
察され

。器形
且穀条



第44図 4類 土器 (2)(1/3)

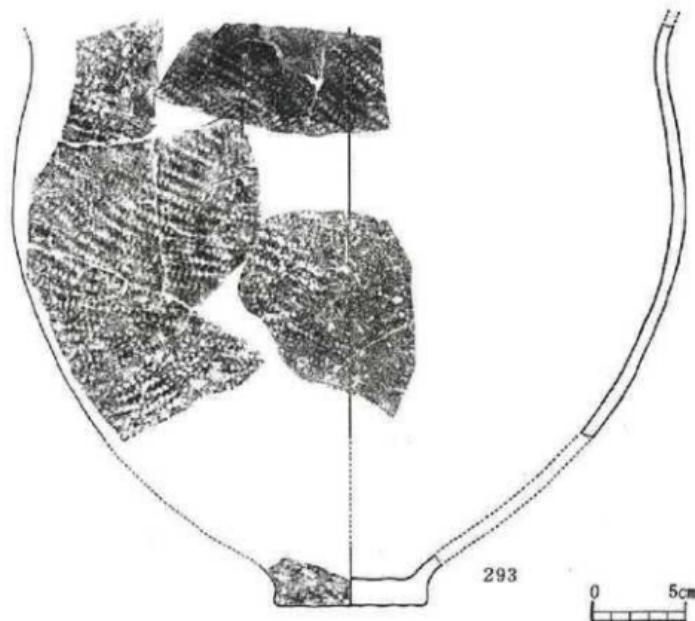
痕で整形されているが、外面は、ナデ整形で仕上げてある。色調は、赤褐色を呈し、胎土には、長石粒が観察される。

e) 281・290

その他に、1片ずつであるが、次のようなものが出土している。

281は、口縁部破片であるが、ちょうど波状を呈し最も高くなった部位と考えられる。器形は、直口し口唇部に凹凸をもつ。突帯は、カーブをもしながら斜位に貼付している。突帯には、指頭で押えたような稜がみられる。内面は、貝殻条痕で調整されており、外面も条痕整形後、突帯が貼付されている。色調は、黄褐色を呈し、胎土には、長石が含まれている。

290は、波状口縁で最も高くなった部位である。器形は、口縁部でわずかに外反する。口唇部には、ヘラ状施文具によるキザミが施されている。突帯は、貼り付けの後、側辺のていねいな整形がみられ、隆帯文のような形状をしている。突帯面には、ヘラ施文具による連続棘突がみられるところもある。内面は、うすい貝殻条痕が施された後、ナデ整形を施している。色調は、茶褐色を呈し、胎土には、長石粒が多く観察される。



第45図 VI 瓦土器

VII 陶土器 (293)

器形は、胴部が球状を呈し、頸部で細くなる。底部は、平底で径 8.2 cm を計り、底部厚みは 1.5 cm を計る。底部器形は、底部から急に立ち上がり、外反して球状の胴部に至る。口縁部器形は、不明である。施文は、頸部から胴部、そして底部側面まで織文が施されている。器内面は、ヘラ磨き整形がみられ光沢をもつ。色調は、茶褐色を呈し、胎土には、石英・長石・雲母が観察される。

② 石 器

石器には石斧（磨製石斧・打製石斧）・打製石器・敲石・磨石等が出土した。

① 石 斧

294 は 10-D 区より出土し、現存全長 13.2 cm、最大幅 6.6 cm、最大厚 2.8 cm、重さ 335 g' を計り、頁岩製の磨製石斧である。研磨は刃部両面より入念に行われ、両側面は製作のため出来た陵線がわずかに判明する程度であり、b 面がより多く研磨が見られ、片刃状を呈する。刃部は両面に大きく刃こぼれが見られ、激しく使用された痕跡が見受けられる。a 面基部付近および b 面の基部端に剥離痕が見られ、装着の為のものが判別されがたい。削痕が両面に残っている。

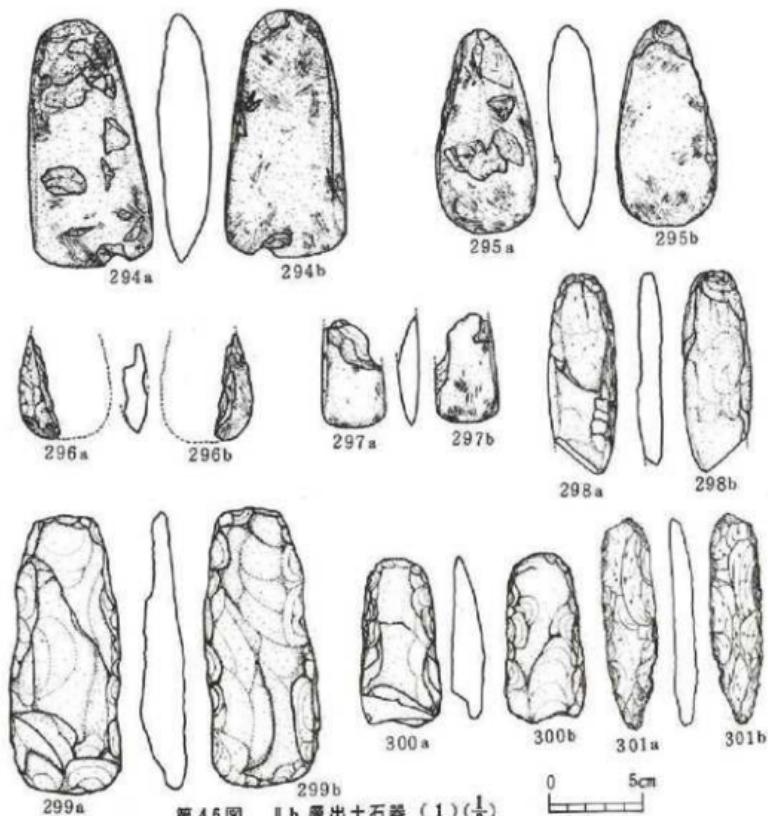
295 は 8-D 区より出土し、現存全長 10.9 cm、現存幅 5.4 cm、現存厚 2.6 cm、現存の重さ 195 g' を計り、頁岩製の磨製石斧である。研磨は刃部両面より入念に行われ器面全体に及び両側面は製作の為か陵線を作り出す。刃部は刃こぼれや磨滅が見られ、その痕跡を再研磨した跡が一部に認められる。a 面はかまぼこ型を呈し、b 面は平坦面を作り出し、片刃状を呈する。両面基部、a 面基部寄り側端および刃部寄り中央付近に打痕が認められ、おそらく製作以後のものと考えられる。削痕が両面に残っている。

296 は 6-D 区より出土し、頁岩製の磨製石斧の一部である。b 面に削痕が見られ、研磨の後を忍ばせる程度である。

297 は 7-D 区より出土し、現存全長 5.8 cm、現存幅 3.4 cm、現存厚 1.0 cm、現存の重さ 25 g' を計り、頁岩製の小型で扁平な磨製石斧である。研磨は両面ともに入念に行われ、器面中央付近で二つに折れ、基部は欠損する。刃部は刃こぼれの為に、小さい剥離が見られ、使用痕と思われる。削痕が両面に残っている。

298 は 10-E 区より出土し、現存全長 10.6 cm、現存幅 3.7 cm、現存厚 1.3 cm、現存の重さ 65 g' を計り、玄武岩製で扁平な磨製石斧である。刃部は欠損している。器面は全体的に剥脱しさらに風化のためか磨滅が見られ、その全貌は知り得ないが、a 面右側端に研磨痕を残すのみである。

299 は 10-C 区より出土し、全長 14.8 cm、幅 6.1 cm、厚さ 2.4 cm、重さ 260 g' を計り、頁岩製の打製石斧である。a 面は大きい剥離痕を残す整形によるが、風化のため器面全体に磨耗



第46図 II b 層出土石器 (1) ($\frac{1}{3}$)

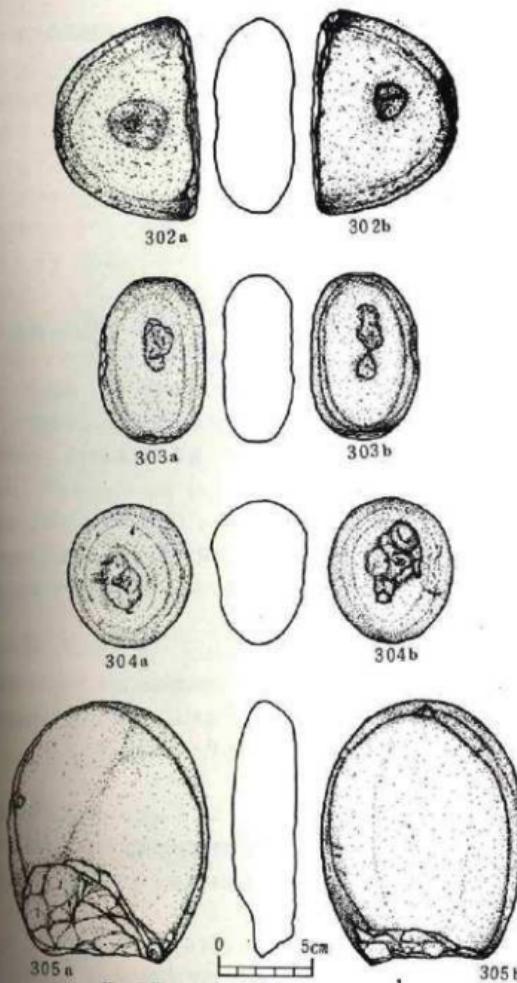
が見られ。わずかに剥離痕が見られる程度で、鋭さは欠いている。

300は10-D区より出土し、現存全長9.0cm、現存幅4.3cm、現存厚2.0cm、現存の重さ87gを計り、頁岩製の扁平の打製石斧である。刃部は欠損する。両面周からの交互剥離により器面を調整し、風化のためか両面ともに磨耗が見られ、剥離痕は鋭さを欠いている。

301は11-C区より出土し、全長11.2cm、幅2.9cm、厚さ1.9cm、重さ40gを計り、頁岩製の石槍状を呈した打製石器である。器形は扁平な素材を用い、両面周より大小の剥離を施し調整が行われ、両側面が刃部として使用されるものと考えられる。

◎敲石

302は8-F区より出土し、現存長径7.8cm、短径10.9cm、厚さ4.2cm、重さ515gを計り、硬質砂岩製の梢円錐を半砕し利用し、両面の表面中央付近に一箇所に浅い窪みがあり、明瞭で



第47図 Ⅱb層出土石器(2)($\frac{1}{3}$)

付近に広範囲で浅く窪みが認められ、打痕跡を有し、使用されたものと考えられる。

◎磨石

305は9-E区より出土し、現存長径14.1cm、幅10.9cm、厚さ3.3cm、重さ720gを計り、硬質砂岩製で扁平状の楕円錐を素材とした磨石である。研磨はa、b面、周端部を丹念に行っているが、風化のためか痕跡は判明しない。両面下端は大きく打ち欠ぎ、さらに大小の剥離

ないが打痕を残す。a面左、b面右側端に打痕が認められ窪み、剥離痕が認められる。使用されたものと思われる。

303は8-F区より出土し、長径8.9cm、短径5.8cm、厚さ3.9cm、重さ285gを計り硬質砂岩製の楕円錐を素材とし、両面表面中央付近に浅い窪みを作り、明瞭でない打痕を残す。a面は中央部の上部端よりに浅く窪み、b面は中央部付近と中央付近上部端よりの2箇所に浅く窪みを作りそれぞれ不明瞭な打痕跡が認められる。さらにa面左側端、下部端、b面右側端、下部端に打痕跡が明瞭に認められ、使用されたものと思われる。

304はD-10区より出土し、長径7.8cm、短径6.6cm、厚さ5.2cm、重さ330gを計り、硬質砂岩製の楕円錐を素材とし、a面中央付近より左側下に浅く窪み、b面は中央

調整により刃器状を呈する。剥離痕は鋭さを欠き磨滅が見られ、使用された痕跡は見られない。

② II a 層出土の遺物

6-D E区を中心に弥生式土器と石器が出土している。

① 土 器

弥生式土器は、壺形土器と甌形土器が出土した。

<甌形土器>

306は6-E区より出土した。口辺部は、立ち上がりながら外反し、口縁部外側は、垂れ下がりながら拡張し、口唇部を作り出している。口唇部上面は、幅広い平坦面を作り、3箇所に3条の削り出し突帯をもつ。口縁内面端部にも、2条の削り出し突帯を有する。調整は、外面で刷毛なのであと、縦位に丁寧な箇なで、内面は箇により、横位および縦位のなで整形で、部分的に剥脱が著しい。色調は、茶褐色を呈する。胎土には石英・長石・金雲母粒などの砂粒を多量に含み、焼成は良好で、堅緻である。

307は6-E区より出土した。口辺部は立ち上がりながら外反し、口縁部外側へ屈折し、上面は平坦面となる。口唇端部はやや窪みを施し、下唇に箇により刻目を有する。調整は、内外面ともに箇なで整形による。色調は、褐色を呈し、胎土には石英、長石、雲母粒などの砂粒を含み、焼成は良好である。

308は6-E区より出土した。口辺部は頸部よりゆるやかに外反し、口縁部外側に、粘土絆を貼り付け、口唇部を作る。上面は平坦面を呈し、中央付近に、指頭整形による窪みがみられ、口縁部外側下方へ傾斜する。口縁部貼り付けは、指頭圧による痕跡がみられる。調整は外面で、丁寧な箇なで整形による。内面は剥脱が見られる。色調は、茶褐色を呈する。胎土には長石、金雲母粒のほかに石英粒を多く含み、焼成は良好である。

309は壺の肩部で、6-D区より出土した。頸部内面付近に、幅0.7cm程度の断面三角突帯をもっている。調整は、外面で丁寧な縦位、内面で横位の箇なで整形による。色調は茶褐色で、外面では、暗茶褐色をも呈する。胎土には石英、長石粒などの微粒を多く含み、焼成は良好で堅緻である。

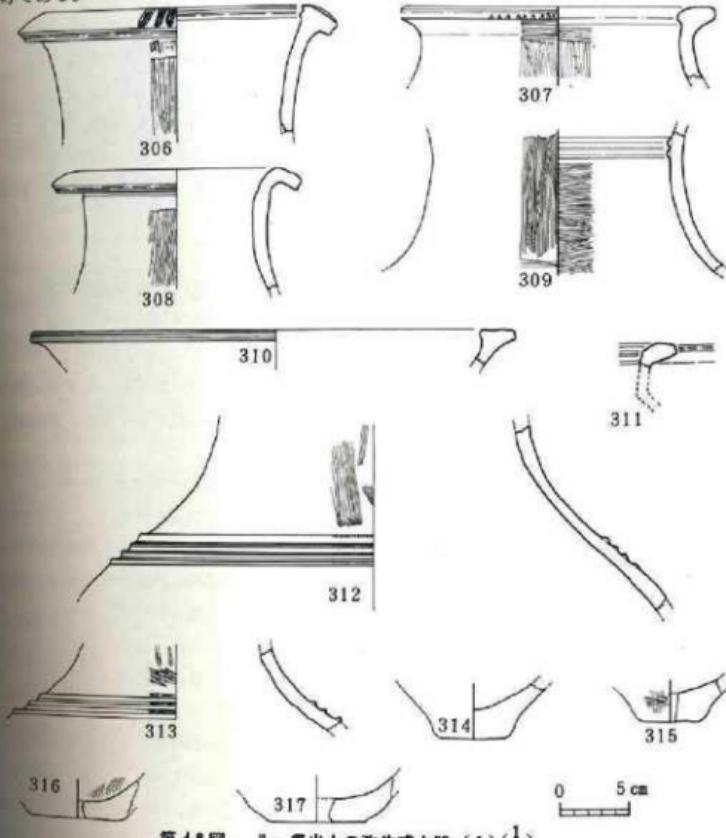
310は6-E区より出土した。口縁部は錐形を呈し、上面は平坦面を作り、指頭調整で、浅い窪みを施し、口唇端部は、箇状のもので浅く窪みを施している。調整は内外面で、横位の箇なで整形による。色調は、淡褐色で、胎土中は灰褐色を呈する。胎土には石英、長石、金雲母粒を多く含み、焼成は良好である。

311は7-D区より出土した。口縁内面端には、2条の削り出し突帯をもち、口唇上面の中央付近に箇を作り、口唇端部は箇状の整形で、浅い窪みを施している。調整は内外面で、横位の刷毛なので整形による。色調は淡茶褐色を呈する。胎土には石英、長石粒の微粒を多く含み、

焼成は、やや良好で、軟質に焼け、摩滅が見られる。

312は壺の肩部で、6-D区より出土した。肩部付近には、幅0.6cm程度の4条の断面三角突帯をもち、刻目が施される。調整は、外面で縦位の窪なで整形され、内面は摩滅が激しく、調整方法は不明である。色調は淡茶褐色で、内面は暗褐色を呈する。胎土には石英、長石、雲母粒などの砂粒を多く含み、焼成は、やや良好である。

313は壺の肩部で、6-E区より出土し、胴部と頸部との接付近に、3条の貼り付け断面三角突帯を有する。調整は、外面において、研きに近い施なで整形による。内面は、剥脱が多くみられる。色調は、茶褐色を呈する。胎土には、石英、雲母粒の砂粒を多く混ぜ、焼成は、良好である。



第48図 IIa 廃出土の赤生式土器(1)(1/4)

314～317は壺の底部で、6-D区、7-E区、8-D区、7-E区より出土した。調整は内外面ともに、刷毛などで整形されたもの（316、317）、摩滅のため調整方法不明なもの（314、315）がある。色調は、茶褐色・暗茶褐色で、内面は褐色を呈する。胎土には長石・石英・金雲母粒などの砂粒を多く混ぜ、表面にまで出ているものが、全てにみられる。焼成は、やや良好である。

<壺形土器>

壺形土器は、口縁部および底部細片のため、器形の全貌については定かでないが、口縁部の形態についてみれば、器形の大半が同類形態となると考えられる。なお、口縁部器形の細部を検討すると、次の三つに細分される。① 口縁部は外側へ屈折して、上面に平坦面を作り、水平を呈するもの（318、319、324、325、327、328、332、334、335、336、337、338、339、340、341、342、343、344、347、349）、② 口縁部は外方へ屈折して、上面に平坦面を作り、外側上方を向いているもの（321、345、365、366、367、368、369、370、371、372、373）、③ 口縁部外側へ屈折して、上面に平坦面を作り、外側下方へ傾斜するもの（323、324、328、330、331、346、348、350、351、353、354、355、362、363、364）とに分けられる。

①について、特徴あるものを記載すれば、次のようにある。

318は、7-D区より出土し、口縁部復原内径35.2cmを計り、直口する口縁端部外側に、粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、口縁端部外側に水平を呈する。口縁部下位には、不定形に貼り付けられた2条の断面三角突帯をもつていて。調整は、内外面ともに、横位・斜位の箇所で整形による。色調は、茶褐色を基調にし、黒褐色を呈する。外面には煤の付着がみられる。胎土には、石英・長石・金雲母粒などの砂粒を多く混ぜ、焼成は、やや良好である。孔は、焼成後のもので、補修孔と思われる。

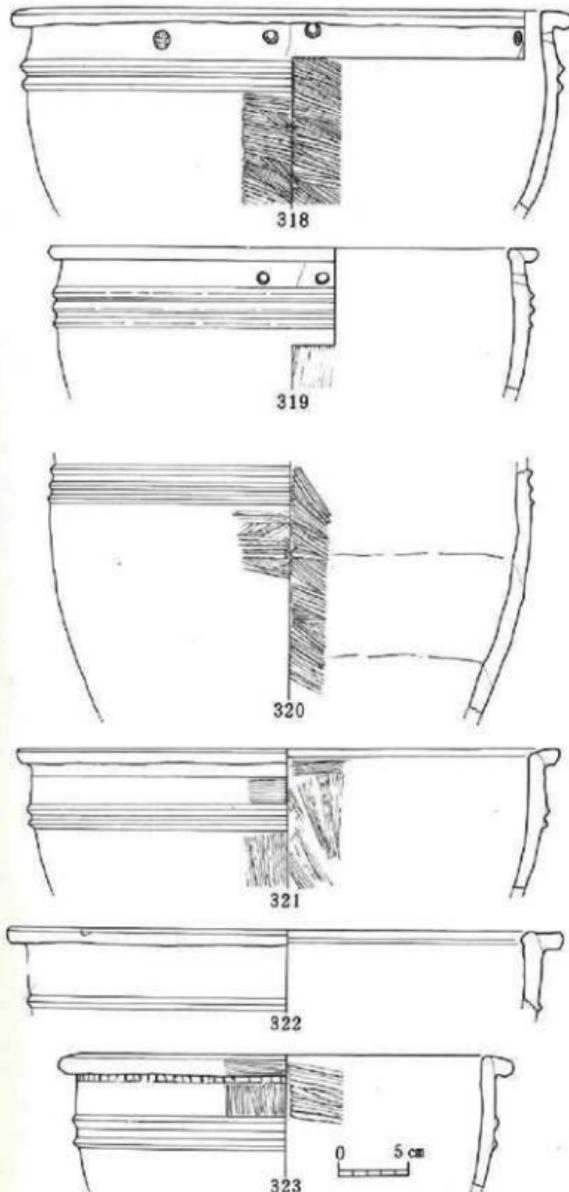
319は、6-E区より出土し、口縁部復原内径30.6cmを計り、やや内側する口縁端部内側は、少し脛らみ、外側に粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、口縁端部外側に、水平を呈する。口唇部の貼り付け部分は、箇所のものにより、整形した痕跡を有する。口縁部下位には、貼り付けによる3条の断面三角突帯をもち、部分的に剥脱が見られる。調整は、内外面ともに、表面に摩滅がみられ、内面に箇所で調整痕が、部分的に残存している。色調は、内外面に茶褐色を呈する。胎土には、2～3mm大の石英粒のほか、長石・金雲母粒の砂粒を多く混ぜ、粒子が表面に出ている。焼成は、やや良好である。孔は、焼成後のもので、補修孔と思われる。

322は、7-D区より出土し、口縁部復原内径32.6cmを計り、やや内側する口縁端部外側に、粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、ほぼ中央付近では、指頭押圧整形が、部分的に浅い窪の痕跡をもち、口縁端部外側に水平を呈する。口縁部の下位には、断面三角突帯をもち、貼り付け手法による。調整は、内外面ともに、刷毛などで整形による。色調

は、淡茶褐色を呈する。
胎土には、石英・長石・
金雲母粒をかなり混ぜ、
焼成は、良好である。

325は、6-E区より出土し、口縁部復原
内径24.2cmを計り、直
口する口縁端部外側に、
粘土紐を貼り付け、口
唇部を作る。上面は、
平坦面を作り出し、外
側端部に、範状のもの
により、押圧整され、
浅く窪み、口縁端部外
側に水平を呈する。調
整は、内面に斜位の刷
毛なで、外面に横位の
刷毛なで整形がみられる。
色調は、内面で黒
褐色、外面で褐色を呈
する。胎土には、石英
長石・金雲母粒の砂粒
をかなり混ぜ、焼成は、
良好である。

333は、7-E区よ
り出土し、口縁部復原
内径22.8cmを計り、わ
ずかに内彎する口縁端
部外側に、粘土紐を貼
り付け、口唇部を作る。
上面は、平坦面となり、
口縁端部外側に、水平
を呈している。調整は
横位の刷毛なで整形で、
内面は、剥脱し、胎土



第49図 IIa 層出土の赤生式土器(2)(1/4)

中の砂粒が表面にみられ、調整方法は不明である。色調は、内外面ともに、茶褐色を呈する。胎土には、長石・金雲母粒のほか石英粒の砂粒をかなり混ぜ、焼成は、やや良好である。

347は、6-E区より出土し、口縁部復原内径38.0cmを計り、やや外反する口縁端部外側に、粘土紐を貼り付け、接合面に竈による整形痕を残し、口唇部を作る。上面は平坦面を作り出し、口縁端部外側に、水平を呈する。調整は、内外面ともに、横位の刷毛などで整形による。色調は暗褐色を呈する。胎土には、石英・長石・金雲母粒などの砂粒を含み、焼成は良好である。

(2)について、特徴あるものを記載すれば、次のようにある。

321は、7-D区より出土し、口縁部復原内径34.2cmを計り、直口する口縁端部外側に、粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、口縁端部外側に、やや上方を向いている。口縁部下位には、貼り付けによる2条の断面三角突帯をもつ。調整は、内面で、横位および斜位の刷毛などで、外面突帯の上位は、竈などで、その下位は、刷毛などで整形による。色調は、外面突帯より上位では、黒褐色で、その下位と内面は、暗褐色を呈する。胎土には、石英・金雲母粒などの砂粒をかなり混ぜ、焼成は良好である。

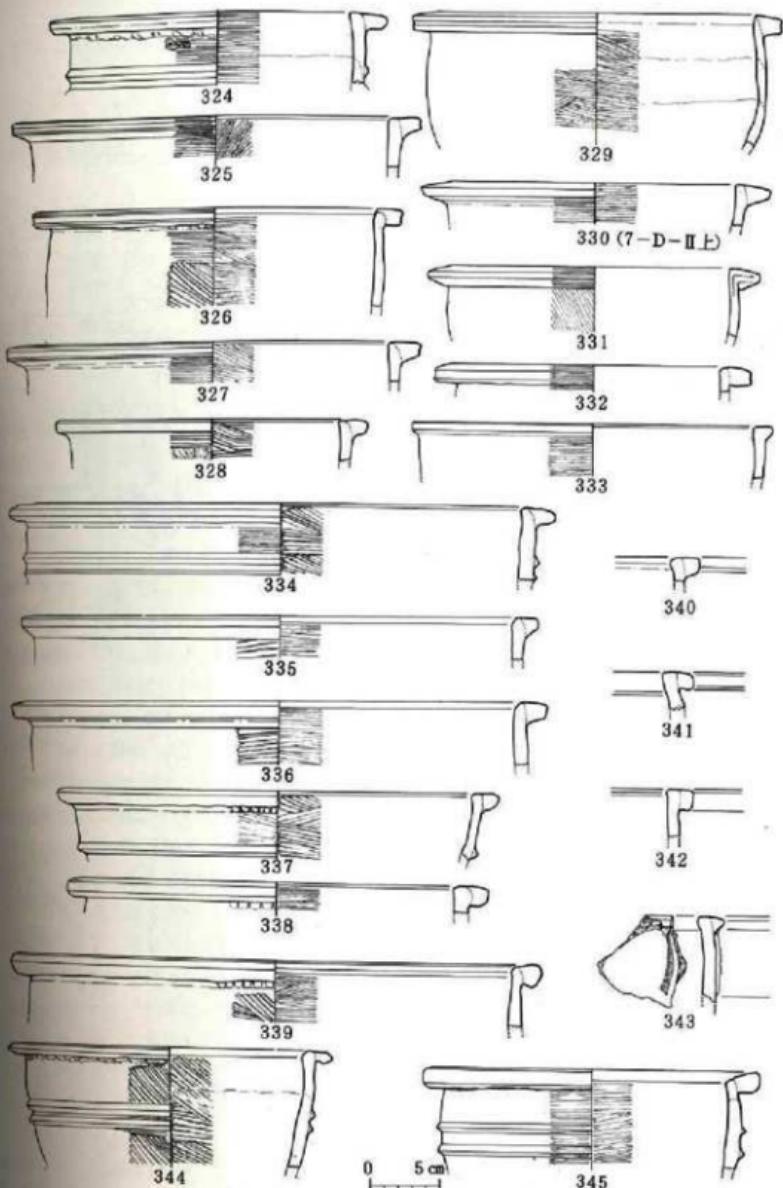
368は、7-D区より出土し、口縁部復原内径23.0cmを計り、直口する口縁端部外側に、粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、口縁部外側上方を向いている。口縁部の下位、貼り付けにより、断面三角突帯をもつ。調整は、内外面ともに、横位の刷毛などで整形による。色調は、茶褐色を呈する。胎土には、石英・長石・金雲母粒などの砂粒を多く含み、焼成は、やや良好である。

372は、7-F区より出土し、口縁部復原内径24.6cmを計り、直口する口縁端部外側に、粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、口縁部外側上方を向いている。口唇部の貼り付けは、竈状のもので押圧され、半円形状に窪み整形されている。調整は、外面で縦位の刷毛などで、内面は、横位の刷毛などで整形による。色調は、褐色を呈する。胎土には、石英・長石・黒雲母粒の微粒を混ぜ、焼成は、良好である。

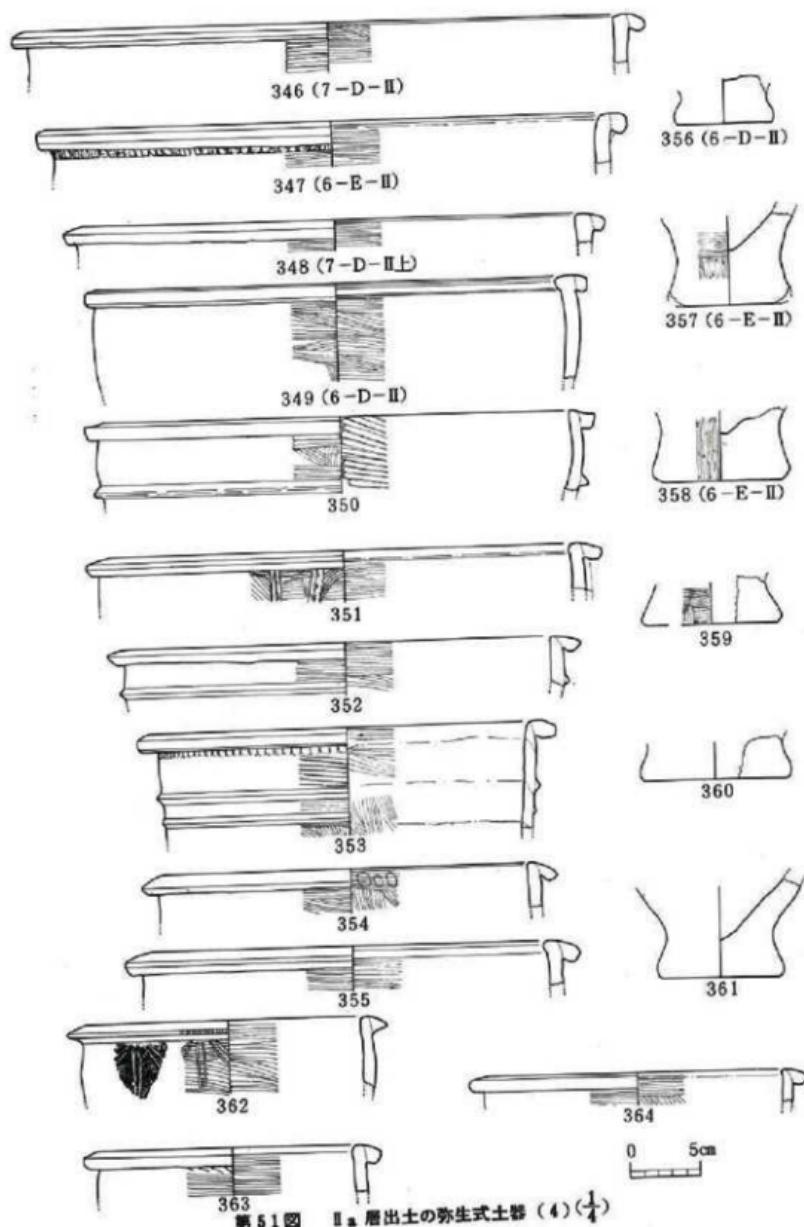
(3)について、特徴あるものを記載すれば、次のようにある。

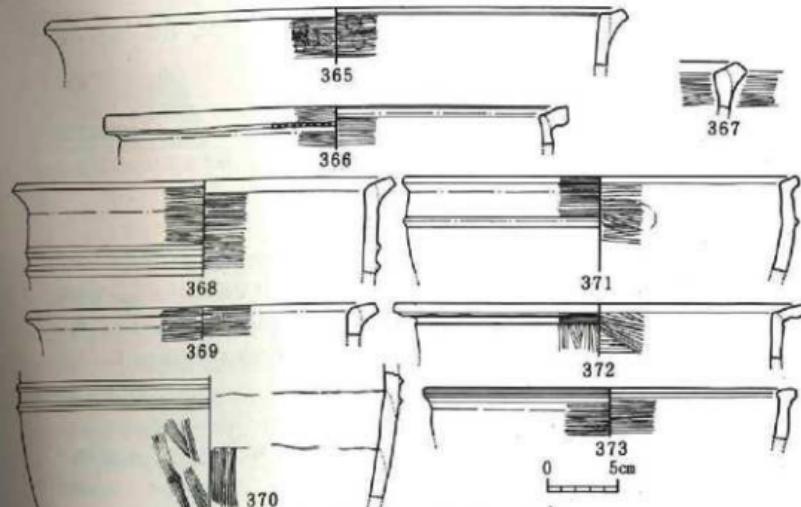
329は、6-D区より出土し、口縁部復原内径22.4cmを計り、やや内曲する口縁部外側に、粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、外側端部は、竈状のもので押圧され、浅く窪み、口縁端部外側下方に傾斜がみられる。調整は、口縁部の外面下位に、指頭圧痕がみられ、脣部付近に横位の刷毛などで、内面は、輪積みの手法が明瞭で、横位の刷毛などで整形による。色調は、外面で灰褐色を呈し、部分的に煤の付着がみられ、内面は茶褐色を呈する。胎土は、石英・長石・金雲母粒の砂粒を含み、焼成は、良好である。

351は、6-E区より出土し、口縁部復原内径32.0cmを計り、直口する口縁端部外側に、粘土を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り、口縁端部外側下方へやや傾斜する。器形は、細片のため定かでないが、口唇下面より縦位で、貼り付けによる2条の断面三角形状の突帯をもち、竈により不定形に整形されている。調整は、内外面ともに刷毛などで整形による。色調は、外面で暗茶褐色を呈し、内面は、褐色を呈する。胎土には、石英・長石・金雲母粒を



第50図 Ia 展出土の弥生式土器 (3) (1)





第52図 IIa層出土の弥生式土器(5)(1/4)

かなり混ぜ、焼成は、良好である。

354は、6-D区より出土し、口縁部復原内径25.2cmを計り、直口する口縁端部外側に、粘土紐を貼り付け、箆による整形で、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、口縁端部外側下方へ極端に傾斜している。調整は、内外面ともに、横位のなで整形による。色調は、外面で暗茶褐色を呈し、煤の付着が見られ、内面は、茶褐色を呈する。胎土には、石英・長石・金雲母粒をかなり混ぜ、表面にまで出ており、焼成は、やや良好である。

362は、6-D区より出土し、口縁部復原内径18.8cmを計り、やや内彎する口縁端部外側に粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、外側端部は、箆により刻目が施され、口縁端部外側下方へ傾斜する。口唇部下面端より箆による継位、斜位に2条の沈線が見られ、小破片のため展開は不明であるが、連続するものと考えられる。調整は、内外面ともに、横位の刷毛なで整形による。色調は、外面で暗褐色を呈し、内面は、茶褐色を呈する。胎土には、石英・長石・金雲母粒の砂粒を多く混ぜ、焼成は、やや良好である。

363は、6-C区より出土し、口縁部内径17.0cmを計り、やや内彎する口縁端部外側に、粘土紐を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、口唇部外側下方へ傾斜する。貼り付け部分は、箆状のもので整形される。調整は、外面で斜位と横位の刷毛なで、内側は、横位のなでにより整形されている。色調は、外面で黒褐色を呈し、内面は、茶褐色を呈する。胎土には、石英・長石・金雲母粒を多く含み、表面にまで出ており、焼成は、良好である。

364は、6-D区より出土し、口縁部内径29.4cmを計り、直口する口縁端部外側に、粘土を貼り付け、口唇部を作る。上面は、平坦面を作り出し、口縁端部外側下方へ傾斜する。口縁部の下位に、貼り付けによる断面三角突帯をもつ。調整は、内外面ともに、横位の刷毛なで整形に

よる。色調は、外面で黒褐色を呈し、内面は、暗茶褐色を呈する。胎土には、石英・長石・金雲母粉を多量に含み、表面にまで出ている。焼成は、良好である。

次に、特徴あるものについて記載すれば、下記のようなものがある。

次に、特徴あるものについて記載する。① 口縁端部は、殆どどの器形において、貼り付け手法により整形されている。② 口縁端部を折り上げ整形したもの（333, 373）、③ 口縁端部を折り下げ、さらに粘土を追付し整形されるもの（331）が見られる。

④について 記載すれば、次のようである。

373は、6-D区より出土し、口縁部復原内径23.6cmを計り、やや内凹する口縁端部を折り上げ、口唇部を作る。口縁内側端部は、突起状に張らみ、上面は、平坦面を作り出し。外側端部は、縦により浅く窪み、口縁端部外側に、やや水平を呈する。整形は、内外面ともに、刷毛なで整形による。色調は、外面で暗茶褐色を呈し、内面は、茶褐色を呈する。胎土には、石英長石・金雲母粒を多く含み、焼成は、やや良好である。

②について 記載すれば、次のようにある。

331は、6-8区より出土した。口縁部復原内径19.2cmを計り、薄手の器形で、やや内彫する口縁端を折り上げ。さらに粘土を追加し、口縁部を作る。上面は、平坦面を作り、口縁端部外側に断面三角形状を呈する。調整は、外面口縁部付近で、横位の刷毛などで、その下位は、斜位の強い刷毛などで整形で整形による。内面は、砂粒がひどく、調整痕は認められない。色調は内外面ともに、茶褐色を呈し、外面に煤の付着がみられる。胎土には、石英・長石粒が含まれ、焼成は、良好である。

次に、器形が細片のため、はっきり判明するものにより、断面三角突帯の有無についてみると次のように分けられる。①突帯をもたないもの（328, 349）、②突帯を1条有するものと次のように分けられる。③突帯を2条有するもの（318, 321, 323, 344, 345, 353）④突帯を3条有するもの（319, 320）とに分かれる。

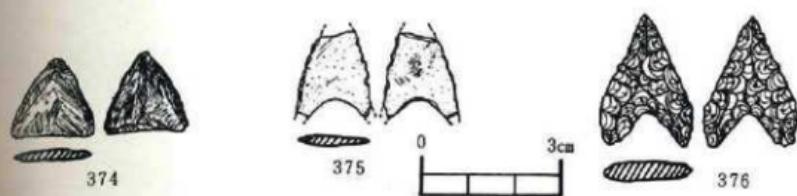
④は、口縫部器形の①に見られる。⑤は、口縫部器形の③に見られる。⑥は、口縫部器形の①・②にみられる。⑦は、口縫部器形の①に見られる。

肧形土器の底部について見れば、同類形態を呈している。

356～362は、壺の底部である。調整は、内外面ともに摩滅がみられ。刷毛などで整形による痕跡を、部分的に残す程度である。胎土には、石英・長石・金雲母粒の砂粒をかなり混ぜ、表面にまで出ており、焼成は、良好である。

② 石 器

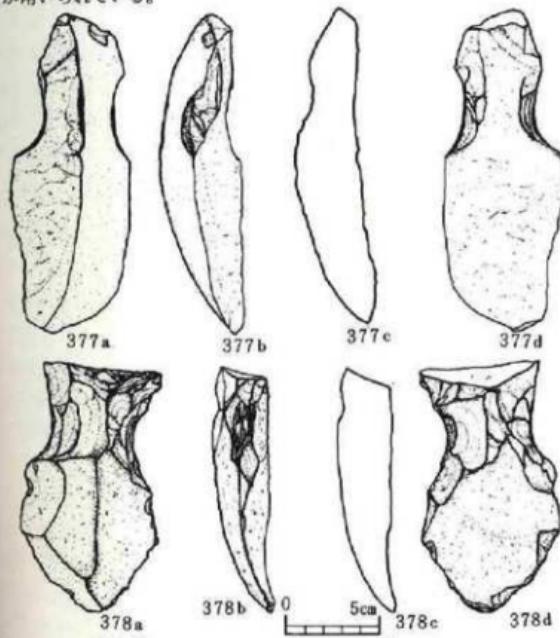
石器には、石鎚(磨製石斧)、石斧(打製石斧)が見られるほか、打製石鎚の表徴品があり、この項で述べる。



第53図 IIa層出土の石器(1) ($\frac{1}{1.5}$)

④ 磨製石錐

374は、5-D区、第II層（黒色火山灰土）上部より、弥生時代中期該当の土器と供伴して出土した。器形は、扁平無茎の平基の磨製石錐で、現存最大長1.7cm、最大幅1.7cm、重さ0.8gを計り、先端部が少々欠けているが、略三角形状を呈する。a、b面ともに、器形全体に研磨痕が顕著に見られ、整形上のためか、器形両面全体的に、腰を作りだしている。素材として頁岩が用いられている。



第54図 IIa層出土の石器(2) ($\frac{1}{3}$)

375は、5-E区、第2層上部より出土した。器形は、扁平無茎で、えぐりのある二等辺三角形状の磨製石鐵で、現存最大長1.8cm、現存最大幅1.5cm、重さ0.8gを計り、先端部および基部両サイドは欠損している。a面は研磨痕が認められるが風化のためか顯著でない。b面は、剥離面で部分的に、調整が見られる。素材として頁岩が用いられている。

④打製石斧

表採品である。器形は無茎の長脚で、凹基式石鐵であり、凹基の形状はV字状を呈し、基部端において、やや狭くなり五角錐に似た形態で、交互剥離により整形されている。最大長2.8cm、最大幅2.0cm、重さ1.4gを計る。素材は黒曜石製である。

⑤打製石斧

377は、10-C区に出土し、長さ17.1cm、最大幅6.5cm、最大厚さ4.5cm、重さ330gを計り、靴形石斧である。素材は硬質砂岩製で、剥片をそのまま利用し、有肩形式の石斧にして、縦に細長い形状のもので、片面に自然面をもっている。えぐりは、左右不定形で、大きくて打欠いだあと、敲打により小さく剥離加工されているが、使用のためか磨滅が見られる。a面右側、b面左側には、自然礫面を残し、a面左側、b面右側、d面は、剥離面そのままである。

378は、8-D区に出土し、長さ13.4cm、最大幅7.4cm、最大厚さ3.1cm、重さ300gを計り、靴形石斧である。素材は、硬質砂岩製の剥片をそのまま利用し、有肩形式の石斧にして、縦に長い形状のもので、片面に一部自然礫面をもっている。刃部は、不定形であるが、略三角形を呈し、器形両側面に剥離痕がみられるが、使用痕か判別されがたい。えぐりは、左右不定形で大きく打欠いだあと、小さい剥離加工により調整され、使用のためか磨滅が見られる。a面左側刃部端付近に、自然面を残すのみで、器形他面は、剥離面そのままである。

第3節 まとめ

鹿児島県内においては、近年、九州縦貫高速道路建設や畠地圃場整備等に伴う発掘調査において、旧石器時代から縄文時代早・前期にかけての大遺跡が発見されている。その中には、特に南九州特有の貝殻文系の円筒土器を出土する遺跡が多いようである。これまで、種子島では、縄文時代早～前期においては、西之表市本城遺跡（註1）を代表してすでに第1章に述べたように曾畠式土器や藤式土器を出土する遺跡が知られていた。

今回の下剣峯遺跡の発掘調査では、I類・II類土器に類別した吉田式系土器や貝殻文系の土器が下層のIV層に出土し、そして、III類～VI類に類別した藤式土器を含む条痕文系土器や突帯文土器・その他が上層のII・III層から出土した。種子島での発掘調査においては、吉田式系土器や貝殻文系土器の発見は、初見であり、しかも、層位的関係を知り得たことは、大きな成果といえる。また、他遺跡とも関連してこれまで縄文時代早～前期に比定される藤式系土器を含むII・III層出土々器の編年上もたらす成果も多いが、与えられた問題点も多い。

また、弥生時代の遺物には、弥生中期に比定される入来式土器（註2）に属する土器が出土している。そして、磨製石鎌が伴って出土し、近辺の遺跡（註3）同様本土の影響をストレートに受けている様相を示している。しかし一方、靴形（魚形石器）打製石斧など、本地域に多くみられる（註4）地城的な石器も出土している。

これらの問題など与えられたものは多いが、ここでは、これらについてまとめ、今後の問題点としたい。

層位について

今回調査の4遺跡のうち、赤木遺跡と下剣峯遺跡では、比較的保存の良好な層位と出土遺物を確認し得た。その結果、火山灰層と出土遺物の関係が明確にされるに至った。

近年、日本における地質学的研究は、火山灰層と遺跡（遺物）の関係について特に研究が進められ注目される現状（註5）であるが、南九州においても例外ではない（註6）。

南九州には、通称「赤ボッコ」と呼ばれる「アカホヤ」層（註7）が厚い堆積でみられる。このアカホヤ層は、南九州の遺跡調査においては鍵層としてあつかわれるテフラ（火山灰）である。この鍵層となるアカホヤ層は、硫黄島から竹島の南海底に位置する鬼界カルデラに源を発したといわれる火山灰であり、¹⁴C年代測定においてB P 6390 ± 90 Y〔松井1966〕という年代が与えられているものである。

種子島は、屋久島と共に鬼界カルデラの最も近くに位置し、平坦地には整然としたアカホヤ層の堆積がみられる。しかしこれまで、アカホヤ層と出土遺物の関係を知る発掘調査例や報告書はみられないが、すでに盛岡尚孝氏は、「……（縄文）前期土器は、全て種子島全島を被っている20～30センチの火山灰層（通称赤ボッコ）下より出土しているが後期以降は全て火山灰層上部より出土している。……」と長年の調査研究成果を述べている（註8）。

今回調査の4遺跡においては、出土遺物と火山灰との関係が明確に把握されたといえる。ここでは、今回調査の各遺跡の順序を利用して、この地域（あるいは、今後の調査においては、種子島全島にあてはまるものになるかもしれない）における順序を復元すると次のようになる。

遺物・色調による区分	出土遺物	赤木・下利峯遺跡の層位
①耕作土	擾乱	1層
②黒褐色土	須恵器・土師器	
③黒色土（砂質）	弥生式土器（中期）	II { ^a _b }
④黒色土（粘質）	縄文式土器（III・IV・V・VI類）	
⑤黄褐色土 ⑥オレンジ色（蛭石）	アカホヤ層 BP 6390±90 Y	III { ^a _b _c }
⑦灰褐色土	縄文式土器（I・II類・塞ノ神式）	IV
⑧黒褐色土		V
⑨桃白色土（基盤）		VI

第2章においても述べたように、Ⅲ層（⑥黄褐色土）が鍵層となっている。Ⅲ層は、上層のⅡ b層に貝殻条痕文系を含む縄文式土器を出土する黒色土層が所在し、下層のIV層に塞ノ神式と貝殻文系の縄文式土器が出土する灰褐色土層が所在している。間層のⅢ層は、40~50cmの堆積が確認されているが保存の良好なところでは、70~80cmにおよぶところもある。このⅢ層は鬼界カルデラに源を発したアカホヤ火山層に相当され（註9）、そのC年代は、BP 6390±90 Y~BP 4640±80 Y〔松井 1966〕という年代が与えられている。したがって、^bC年代に従えば、IV層出土の貝殻文系土器は、約6000年以前の文化となり、Ⅱ b層出土の貝殻条痕文を含む縄文式土器は、それ以後の文化ということになる。

このアカホヤ火山灰層は、種子島・屋久島全域に厚い堆積がみられ、九州や四国にも広がる広域の火山灰である（註10）。最近の発掘調査において、このⅢ層の上・下層に遺物が発見されている。2、3例あげると、このアカホヤ層の上層に出土するものでは、西之表市指辯遺跡（註11）で曾畠式土器、西之表市池ノ久保遺跡（註12）で轟式土器、金峰町上焼田遺跡（註13）で轟式土器、出水市出水貝塚（註14）で並木式・阿高式土器、溝辺町桑ノ丸遺跡（註15）で西平式・指宿式土器などの出土をあげることができる。

下層に出土するものでは、溝辺町桑ノ丸遺跡で前平式・吉田式・押型文・塞ノ神式土器、加世田市村原（椿ノ原）遺跡（註16）で吉田式・前平式・塞ノ神式土器があげられ、まだ報告書は刊行されていないが鹿児島市加栗山遺跡（註17）などにも確認されている。

以上のような出土例からこのアカホヤ層を境として、曾畠式・轟式系統の土器は上層に出土し、吉田式・前平式・塞ノ神式系統の土器は、下層に出土しているようである。今後、このように絶対年代の判明する火山灰層によって遺物が区別されることは、今後の土器編年において

に寄与するものと考える。

遺構について

本遺跡出土の集石は、IV層から検出され貝殻文系の縄文式土器に伴うものと考えられる。全体に「バラツキ」がみられ、詳細に観察した結果、掘り方・焼けた痕跡・灰や炭化物の残存・腐蝕物の附着などはみられず周辺から土器の小破片の出土を見るのみであった。本県の縄文時代早~前期の集石は、栗野町花ノ木遺跡(註18)・溝辺町桑ノ丸遺跡(註19)・頬蛙町北手牧遺跡(註20)・鹿児島市加栗山遺跡(註21)など多くの遺跡にみられるがその性格は不明である。

遺物について

IV層出土の縄文式土器

縄文式土器は、I類からVII類土器に類別し説明をおこなったが、IV層からは、I類とII類が出土した。ここでは、各器形についてまとめ、位置づけをおこなってみたい。

I類土器

器形および施文からみて吉田式土器(註22)に属するものと考えられる。I類土器は、口縁部1点と底部1点という極小量の出土であるが、器形および施文のうえからII類土器とは形態を著しく異なるものである。河口貞徳氏の吉田式土器の定義(註23)は、次のようになっている。「…口縁部は稍々外反し、口縁上面は平坦で外部へ向って傾き、刻目を附している。…頸部に貝殻口縁の圧痕を並列し、頸部以下は、貝殻口縁を土器面にあて、水平に右側へ移動しながら、圧力を断続的に加える方法に依って施文したと思われる条痕を施してある。底部は箇状の工具による縦刻線を施したもの……」

以上のように、I類土器は、器形および施文においてこの定義にあてはまるものである。強いて吉田式土器との違いをあげれば、縦文の吉田式土器が黒褐色の色調を呈するのに対し、60・61は、赤褐色の明るい色調を呈する点と本遺跡出土のものが貝殻腹(口)縁の棘突にシャープさがない点であるが、いずれも形式を越えるものではない。

吉田式土器の種子島における出土例は、本遺跡を含め3ヶ所をあげることができる。他の2ヶ所は、中種子町野間(註24)出土と西之表市安城川脇(図16)出土例であるが、いずれも小量の出土である。今後の調査においては、種子島における南九州の貝殻文系円筒土器の南限としての吉田式土器文化を把握することができよう。

II類土器

II類土器は、本遺跡IV層出土のうちI類土器2点を除いた他のすべてのものにあたり、共通する器形をもつところからIII類とした。そして、施文のうえからa b cの3つに細分した。

基本的な器形は、口縁部は若干内彎し口唇部平坦面は内傾する傾向がみられるものである。また、なかには口縁部外面に縦位の突起をもつものや頭部に横位の突起をもつもの、さらに、頭部に縦位または横位の突起をもつものなど特徴的なものも含まれている。

II a類は、器面にクシがき文を羽状および鋸歯文状に施すもの。II b類は、貝殻腹縁を棘突

するもののうち、貝殻腹縁の肋が連続瓜形状に表現されるものである。II c類は、b類同様貝殻腹縁を棘突するもののうち、貝殻腹縁の肋が方形状を呈し連点文状に表現されたものである。以上のように、施文上においてa・b・cの違いが認められるが、出土遺物の中には、-とのようにaとbの施文を併用して使用しているものもみられる。このことは、非常に近い関係を示すものである。

II類土器の本県での出土例をみると非常に少なく、種子島においては初見である。これまでこの器形に属するものは、形式化されていないが溝辺町桑ノ丸遺跡（註25）において桑ノ丸Ⅲ類と類別されたものが同器形に類似している。特に、桑ノ丸Ⅲ類土器の施文は器面にクシがき類文を羽状および鋸歯文状に施しているが、本遺跡のII a類の器形および施文に酷似するもので文を羽状および鋸歯文状に施しているが、本遺跡のII a類の器形および施文に酷似するものである。II b類およびII c類の施文は、石坂式土器（註26）にみられるもので、他には、吉田式土器や前平式土器の角筒土器（註27）にもみられる。しかしながら、施文上は類似しながらも器形の上では、類似性は少ないものと考えられる。最も類似した出土例は、姶良町小山遺跡（註28）出土の石坂式変形土器として紹介してあるもので、突起をもち貝殻腹縁連点文を羽状に施文する形態をもつものが酷似している。報告書は刊行されていないので詳細は、不明であるが、今後、整理が進むにつれてこの形式の形態が把握されるものであろう。

II b層出土の縦文式土器

III層のアカホヤ火山灰層と弥生式土器中期の包含層（II a層）の間層に出土する土器であり整理の便宜上、III類～V類に類別して説明をおこなった。ここでは、類別にまとめと問題点を記述してみたい。

II類土器

器面内外に条痕文を施すものであり、底部器形は尖底を呈し胴部上方で彎曲しながら口縁部は聞くものである。口唇部は、平坦なものとキザミを施すものがある。且類土器にみられる特徴は、器面に施される条痕と尖底であり、轟A式土器（註29）に類似するものと考えられる。

V類土器

ヘラ状の施文具で2列に棘突文が施されるもので、口唇部と器外面にみられる。254には、口唇部内面にも連続棘突文がみられる。口縁部および胴部の細片のため全体の器形は、不明であるが、胴部から口縁部へ直口するものと胴部に張りをもつものがみられる。これまで、管見あるところ、このタイプのものは、不明であり、今後の研究に依るものである。ただ、ヘラの知るところ、このタイプのものは、不明であり、今後の研究に依るものである。ただ、ヘラの知るところ、このタイプのものは、不明であり、今後の研究に依るものである。

V類土器

ヘラ状施文具による沈線で文様を施文するものを類別したが、個体数は少ない。しかしながら、263のような特徴のあるものもみられる。この土器は、口縁部が直線的に広がるもので、口

唇部に刻目を施し、口縁部外面には並行する沈線の間に斜めの沈線を織杉状に施す文様を巡らしている。そしてその下方には、曲線を使用した文様が施されるものである。このような器形および文様は、管見の知るところこれまでみられなかったが、最近の金峰町阿多貝塚の調査（註31）で、この形式のものが出土したことである。阿多貝塚の資料検討において本遺跡の沈線文系の土器もある程度把握されるであろう。

Ⅳ 頸土器

口縁部外面に、突帯文を施したもので、突帯文によってa～eの5種類に類別した。いずれも、轟B式にみられる指頭でつまんだミミズバレ状の隆起線文はみられず、丸味をもった突帯で太いものである。特に、264～275は、器壁が薄く突帯がていねいで滑石を含み光沢をもつ華麗な土器である。器形は、口縁部が内側にキャリッパー状を呈し春日式（鹿児島市春日遺跡）土器（註32）の影響が考えられるが、今後の検討に待ちたい。

Ⅴ 頸土器

器形は、胴部が球形で底部が平底を呈するものである。頸部付近から胴部・底部の破片がみられるが、器面全体に纏文を施すものである。1個体の出土であると考えられるが、これまでこの形態の土器は、みられない。今後の資料の増加を待ちたい。

層位からみた土器編年上の問題点

すでに層位の順で述べたが、最近の調査において“アカホヤ”層（本遺跡ではⅢ層）を境として上・下に纏文式土器が出土する例がみられ、特にこの“アカホヤ”層は、鍵層として注目されるにいたっている。その結果、アカホヤ層下に、吉田式・前平式・石坂式・塞ノ神式土器等の貝殻文系円筒土器が出土し、上層には、曾畠式・轟式系土器が出土する例が増加しつつある現状である。たとえば、西之表市指辺遺跡の曾畠式土器や金峰町上焼田遺跡の轟式土器は、アカホヤ層上部に出土したことは動かし難い事実といえる。また、本遺跡のⅢ類土器と轟式土器との類似関係が判明すれば、これらの問題に1例を加えることになる。

今後、地質学研究の分野での火山灰の研究と対比しながら、層位の出土例を把握し、編年をながめる必要があろう。

Ⅵ 唐出土の弥生式土器について

下利峯遺跡出土の弥生式土器は、器形および整形を比較検討すれば、本土における弥生時代中期に比定され、入来式土器に該当するものと考えられる（註33）。このように弥生時代中期になると土器文化の流入は、薩南諸島の島々を経て沖縄地方まで、その分布がみられる。特に海岸地方を中心に遺跡が立地している。その細部についてみれば、南九州を経て、本土の土器文化が移入定着し、その移入文化の中で土着して、地域性の強い特色がみられるようになってくる（註34）。

これまで種子島においては、埋葬遺跡として知られる南種子町の広田遺跡（註35）・中種子

町の鳥ノ峰遺跡（註36）や南種子町の浜田遺跡（註37）・中種子町の阿獄洞穴遺跡（註38）・西ノ妻市の泉原遺跡（註39）などがみられ、この時期に属する土器が確認されている。本遺跡の近辺遺跡としては、泉原遺跡がみられる。

石 器

IV層出土の石器

石器は、IV層出土の縄文式土器に伴って、1点出土したのみであり、中央に凹面をもつ敲石と考えられるものである。しかしながら、土器出土量に対し、石器の出土はほとんどない状態であった。このことは、桑ノ丸遺跡・村原遺跡においても同様、貝殻文系円筒土器に伴う石器は、少ない傾向がみられるものである。

II b 層出土の石器

II b 層からは、石器ともに多量に大小の自然円錐や打碎れた剥片がみられた。本遺跡は海岸に近いためか、浜石による素材も考えられる。まとまりうる石器としては、磨製石斧、打製石斧・敲石・磨石などがみられた。

磨製石斧は、幅のわりに長さが短かく、片面がかまぼこ型を呈し、略三角形状を呈するもの、短冊型を呈するものなどがみられる。打製石器には、打製石斧と石槍状の石器とがみられる。打製石斧は、短冊型を呈するもの、扁平で細長い形状のものなどの出土がある。敲石は、大小の楕円錐を素材とし、中央に浅い凹面をもつものが全てにみられる。磨石は、両面・側端周に研磨の跡が認められる。

これらの石器は、II b 層中より出土しているものであるが、II b 層出土のIII類～VII類土器と共に伴するものか、不明である。今後の資料の増加によって検討するべきものであろう。

II a 層出土の石器

II a 出土の石器は、弥生時代中期の土器と共に、磨製石錐・靴形石器（魚形石器ともいいう）が出土した。

磨製石錐は、第5表のように、県内において出土例がみられ、弥生中期に属するものは、14箇所におよんでいる。

種子島においては、7箇所に出土例をみると、弥生時代中期に属するものは、4箇所の遺跡において発見例が知られる。本遺跡では、弥生時代中期の土器と共に、2本の出土がみられる。

本土の磨製石錐は、第5表のような分布を示しているが、ほとんどは表面採集によるものか、発掘調査においても、遺構より出土したものか判明せず、性格・時期を正確にすることはできない。一の宮・花牟礼・山ノ口・吉ヶ崎遺跡（註40）・高橋貝塚の1本は、遺構より出土している（註41）。

第5表からは、ほとんどの遺跡において、弥生時代中期の土器と共に出土例を知ることができ、現在のところ大隅半島と種子島において、大部分を占めている。本遺跡に例をみると

第5表 磨製石器 出土地名表 (鹿児島県)

遺跡名	所 在 地	個数	共 伴 遺 物
一の宮	鹿児島市郡元町一の宮神社境内	4	弥生式土器(一の宮)・石斧・石包丁
牟田尻	出水市武本字牟田尻	6	弥生式土器(須玖・成川)・砥石
岩本	指宿市岩本小牧	2	弥生式土器(中期)
大住	大口市羽月大住	4	
川西	大口市西太良川西	2	
成川	指宿郡山川町成川曲迫	2	弥生式土器(須玖)・铁劍・铁鎌
高橋	日置郡金峰町高橋	2	弥生式土器(前期・中期)・石器・骨角器
入来	日置郡吹上町入来	1	弥生式土器(中期・後期)・打製石器・打製石斧・輕石製品
麦生田	姶良郡栗野町麦生田	2	弥生式土器・石斧
桑の丸	姶良郡溝辺町崎森南桑の丸	1	弥生式土器(成川)
山神	姶良郡溝辺町麓山神		
七ツ次	姶良郡溝辺町麓七ツ次		
中尾	姶良郡隼人町西光寺	1	弥生式土器(成川)
天提	曾於郡布志町潤ヶ野天提	1	弥生式土器(須玖)・块入石斧
安楽百洞穴	曾於郡布志町安楽百洞穴	1	
花牟礼	肝属郡高山町新富花牟礼	1	弥生式土器(山ノ口・成川)・磨製石斧
瀬戸口原C	肝属郡高山町後田瀬戸口原	1	弥生式土器(前期・中期)・石包丁
瀬戸宇治B	肝属郡高山町後田瀬戸宇治		
山ノ口	肝属郡大根占町山ノ口	12	弥生式土器(山ノ口)・曲玉・岩偶・石棒
吉ヶ崎	肝属郡串良町上小原吉ヶ崎	5	弥生式土器(中期)・磨製石斧
二本松	西之表市二本松	2	弥生式土器
現和	西之表市現和	3	弥生式土器
峯	西之表市安納		弥生式土器・打製石斧
下剥峯	西之表市現和下剥峯	2	弥生式土器(中期)・靴形石斧
輪之尾	熊毛郡中種子町田島輪之尾	4	弥生式土器・磨製石斧・砥石・石皿
中田	熊毛郡中種子町板井中田提		弥生式土器
満足山	熊毛郡中種子町野間満足山		弥生式土器(中期・後期)
千草原	熊毛郡中種子町増田千草原		弥生式土器(後期)・磨製石斧
鳥ノ峰	熊毛郡中種子町増田鳥ノ峰		弥生式土器(中期・後期)
サウチ	大島郡笠利町崎原	1	

うに、土器と共に本土の文化の様相をストレートに受け入れているのではなかろうか。

靴形石器については、「石器群を出土した遺跡からは土器の出土で微弱であるが弥生式が出上している。簡略ではあるがそれだけに進歩した製作技術を示す点から見て、又農耕具や穀物用を考える石器の出土様相から見ても弥生式文化期に属する遺跡であることは疑うことは出来ない」とあり(註42)、さらに「安納峯部落付近の石材集積地よりえられた石器群から考えてみるとその生産様相は大体に於いて陸耕であったろうと思われる。なぜならその石器群の大部分のものが土耕具と考えられるからである。精巧な磨製品ではなく打製の粗造品であり、然かも刃先が尖形を示すことは陸耕と関係あることを思わせるものといえよう。尚注意しておきたいことは有肩にして斧口の尖形をなす型式の打製粗造の土耕具と考えられる石器は大隅半島薩摩半島にも一般に弥生式石器として発見されることである。それらは生産の様相に於いてもまた酷似するものをもっていたことを意味するものであろう」とある(註43)。靴形石器は、魚形石器ともよばれる打製石器で、農耕具としての使用が考えられ、すでに屋久島、種子島を中心にして、その分布が知られている。本土における靴形石器は、近年、金峰町の上焼田遺跡(註44)・始良町の荻原遺跡(註45)・鹿児島大学敷地内の釣田遺跡(註46)などの遺跡において、少數であるがその出土例が知られる。

種子島においては、安納峯遺跡などにみられるように多く出土している。これらが地域性を示す石器なのか、今後資料の増加によって検討を要する資料と考えられる。

註 1. 三友・河口・国分(1953)「薩南諸島の考古学的調査」考古学雑誌39卷1号

西之表市教育委員会(1973)「本城・田之脇遺跡調査報告」

註 2. 河口直徳1976「入来遺跡」鹿児島県考古 第11号

註 3. 旭慶男1975「種子島における弥生式土器」鹿児島大学考古学研究会紀要第1号

註 4. 註1に同じ

註 5. 町田洋(1977)「火山灰は語る」蒼樹書房

註 6. 石川秀雄・加藤芳朗(1977)鹿児島市加栗山における火山灰層の層序と¹⁴C年代』鹿大教育研紀要No.28 大木公彦・早坂祥二(1970)「鹿児島市北西部地域における第四系の層序」鹿大理学部紀要No.3

註 7. 松井建(1966)「大隅半島笠之原台地のアカホヤ層の噴出年代」地球科学87卷

註 8. 盛瀬尚孝(1971)「先史時代」中種子町郷土誌

註 9. 町田洋(1977)「火山灰は語る」蒼樹書房

註 10. 新井房夫・町田洋(1977)「日本における超広域火山灰の発見」気象No.241

註 11. 鹿児島県教育委員会(1977)「指辺遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書5

註 12. 蚊島安豊(1978)「池ノ久保遺跡概観」潮流 第1号

註 13. 鹿児島県教育委員会(1977)「上焼田遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書5

註 14. 河口直徳(1958)「出水貝塚」鹿児島県文化財調査報告書 第5集

註 15. 鹿児島県教育委員会(1977)「桑ノ丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書7

- 出
摘
来
て
大部
も
とい
魔摩
また
魚形
中心
44)
少数

性を
- 育研紀
紀要No.3
- 註16. 加世田市教育委員会（1977）「村原（裕ノ原）遺跡」加世田市埋蔵文化財報告書
註17. 鹿児島県教育委員会（1977）「鹿児島県加栄山遺跡」日本考古学年報 28
註18. 鹿児島県教育委員会（1975）「花ノ木遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 1
註19. 註15に同じ
註20. 河野治雄
註21. 註6に同じ
註22. 河口貞徳（1955）「南九州の条痕文土器」 石器時代 1
註23. 註22に同じ
註24. 註8の文献中に、種子島に吉田式土器が出土したことが記載されているが、遺跡名・遺物の紹介はみられない。後、盛園尚孝氏の好意によって出土土地・遺物の御教示を得た。
註25. 註15に同じ
註26. 註22に同じ
註27. 註16に同じ
註28. 河口貞徳（1972）「塞ノ神式土器」 鹿児島考古 第6号
註29. 松本雅明：富鹿卯三郎（　）「神式土器の編年」 考古学雑誌 第47巻第3号
註30. 国分・盛園・重久（1967）「鹿児島県屋久島一揆遺跡の発掘調査概報」 考古学雑誌第53巻・第2号
註31. 金峰町教育委員会（1978）阿多貝塚（3月報告書刊行の予定）
註32. 河口貞徳・河野治雄（1955）鹿児島市春日町遺跡発掘調査報告 鹿児島県考古学会紀要第4号
註33. 註2に同じ
註34. 註3に同じ
註35. 盛園尚季、国分直一（1958）「種子島広田の埋葬遺跡の調査報告」 考古学雑誌第43巻・第2号
註36. 盛園尚季（1968）「熊毛諸島の先史時代」 金関文夫古稀記念論集「日本民族と南方文化」
註37. 註3に同じ
註38. 註8に同じ
註39. 註3に同じ
註40. 鹿児島県教育委員会（1978）「大隅地区分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 19
註41. 鹿児島県教育委員会（1976）「牛田尻、カラム追跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
註42. 三友国五郎・河口貞徳・国分直一（1958）「薩南諸島の考古学的調査」考古学雑誌第43巻2号より
註43. 註42に同じ
註44. 註13cに同じ
註45. 始良町教育委員会（1978）「荻原遺跡」（3月報告書刊行の予定）
註46. 1976年発掘調査済。

第5章 大四郎遺跡の調査

第1節 調査の概要

第2節 遺構・遺物

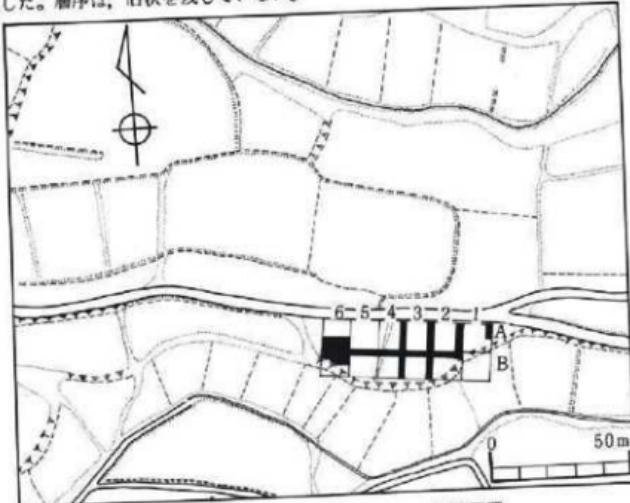
第3節 まとめ

第1節 調査の概要

大四郎遺跡は、安納地区と現和地区との境を流れり安納川、南方約550mの所に位置し、標高約36m程のハツ手状を呈する台地縁辺部で、東西に狹長な畑地にあたる。台地北側・南側は湧水があり、迫田となる。北西約350mの台地上に下剥峯遺跡がある。

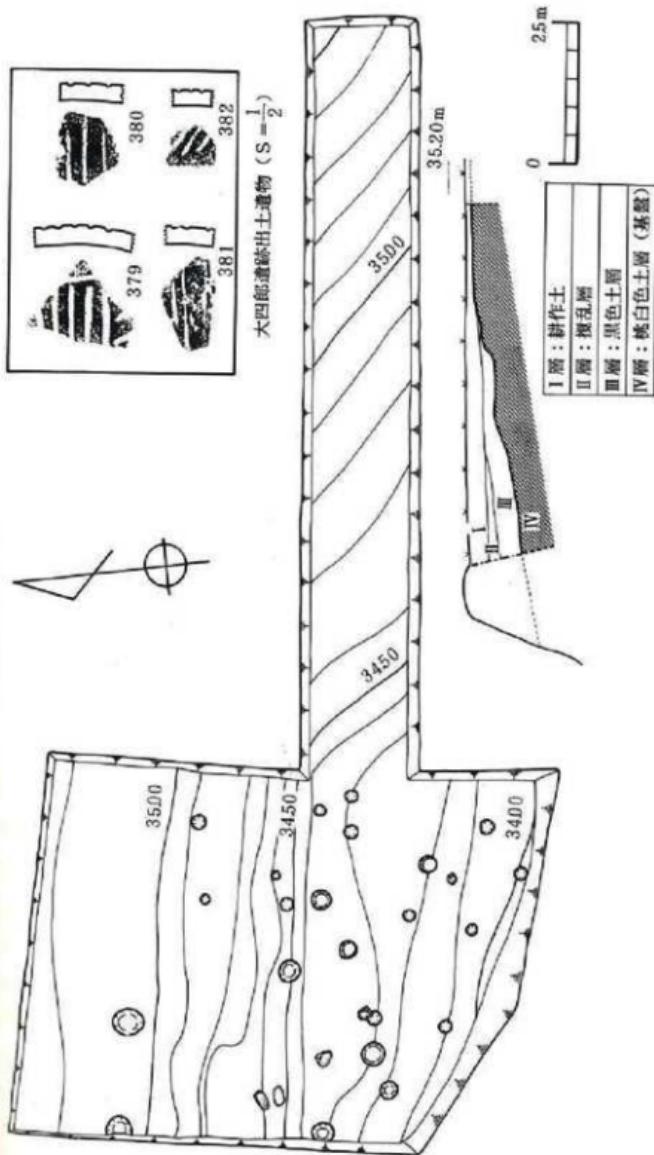
分布調査において遺物の散布の見られた地域は、庄司浦部落より西方へ延びる農道南沿い、南向きの傾斜をもつ畑地で、約2600 m²である。

発掘調査は、北東隅を基軸とし、10m×10mのグリッドを設定した。そして南方向にA・B西方向に1～6と呼称する。まず確認調査から開始した。確認調査は、畑地中央部西方向のB区列北側に巾2m×60mのトレンチを設定し、さらにそれを基軸に、2区列、3区列、4区列に南北方向に巾2m×5m、巾2m×10m、巾2m×20m 2本を設定した。その結果、7-Bに南北方向に6-A区、6-B区を拡張し、その部分の平面調査をおこなった。畑地は、基盤整備および耕作のため搅乱がみられ、耕作土の搅乱部分から曾煙式土器が出土した。層序は、旧状を残していない。



第55図 大四郎遺跡周辺地形とトレンチ配置図

第56図 大四郎遺跡平面図・土層断面図・出土遺物実測図



遺跡の層位

大四郎遺跡は、南傾斜地の縁辺部に位置しているために、地形は大きく削平をうけている。第4回断面図は、7-A・B区西側壁の断面である。層位は記述すると次のようになる。I層耕作土。II層は、傾斜上面地区の削平された桃白色の火山灰が再堆積している。これは、基盤整備における土移動によるものであろう。III層は、黒色火山灰層であり、無遺物層である。IV層は、桃白色的火山灰層で、基盤層をなす。

第2節 遺構・遺物

遺跡の遺構

遺構は、II層下部に、III層を掘り込んだ柱穴が検出されている。柱穴は傾斜地に立地し、径30cm以上のものが8箇、それ以下のものが14箇検出され。深さは、深いものが約35~40cm、浅いものが約20cm以下である。一部削平されているため、建物として並列するものはみられない。

遺跡の遺物

縄文式土器が、7点出土している。いずれも、表層擾乱層より出土した。土器は、器厚が0.6cm程度の薄手の胴部細片であるため、器形は不明である。文様は、細形の沈線をもって、文様を描き、直線文が施されている。色調は、赤褐色を呈する。胎土は、わずかに長石・石英粒を混ぜ、焼成は良好である。

第3節 まとめ

大四郎遺跡においては、耕作土擾乱中より曾畠式土器7点が出土したのみで他に遺物は出土していない。遺構は、7-A・B区付近にIII層黒色土の流入した柱穴が確認されている。このIII層中には、出土遺物はみられず柱穴の時期は不明であった。柱穴の位置する地形は、非常に傾斜が強く、柱穴間のまとまりはつかめず建物等の存在は不明であった。

出土した曾畠式土器については、擾乱層中で出土層位は不明であり、また、細片のため器形も不明である。第1章で述べたように、種子島における曾畠式土器出土遺跡は、13ヶ所知られており、1例を加えることになった。また、最近、同台地延長上の指辺遺跡（註1）より、赤ボッコ（アカホヤ）層上部の黒土層中より曾畠式土器が出土しており、ほぼこの層に相定できるのではないか。

註1 鹿児島県教育委員会（1977）「指辺遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書5

第6章 内和遺跡の調査

第1節 調査の概要

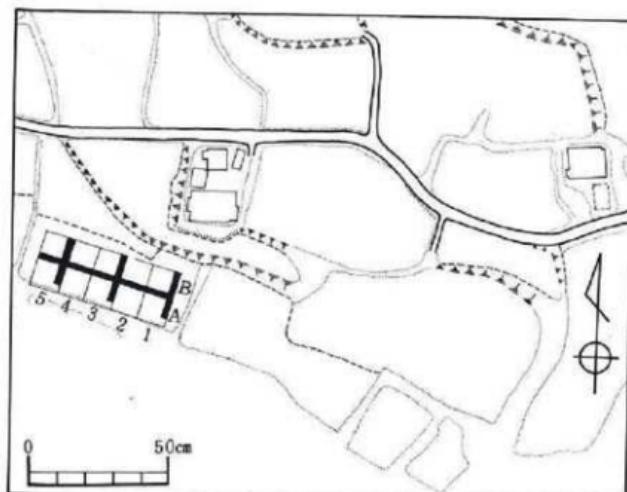
第2節 遺構・遺物

第3節 まとめ

第1節 調査の概要

内和遺跡は、庄司浦港付近に流れ込む小川の北側に隣接する標高約33mの台地縁辺部に位置している。北西約 mの台地に大四郎遺跡がある。

分布調査において遺物の散布の見られた地域は、民家南側沿いの畠地で約 2700 m² にある。発掘調査は南東隅を基軸にし、10m×10mのグリッドを設定した。そして北方向にA、B西方向に1～5と呼称することにし、まず、確認調査から開始した。確認調査は、畠地中央部東方向のB区列南側に幅2m×50mのトレンチを設定し、さらに、それを基軸に、1区列、3区列、5区列に南北方向のトレンチを設定した。その結果、南東方向にゆるやかな傾斜がみられ、4—A区、4—B区、5—A区、5—B区の黒色土最下部から遺構（柱穴）が確認された。2—B区、3—A区、3—B区、4—B区を中心にして土師器・須恵器の出土がみられた。



第57図 内和遺跡周辺地形とトレンチ配置図

遺跡の層位

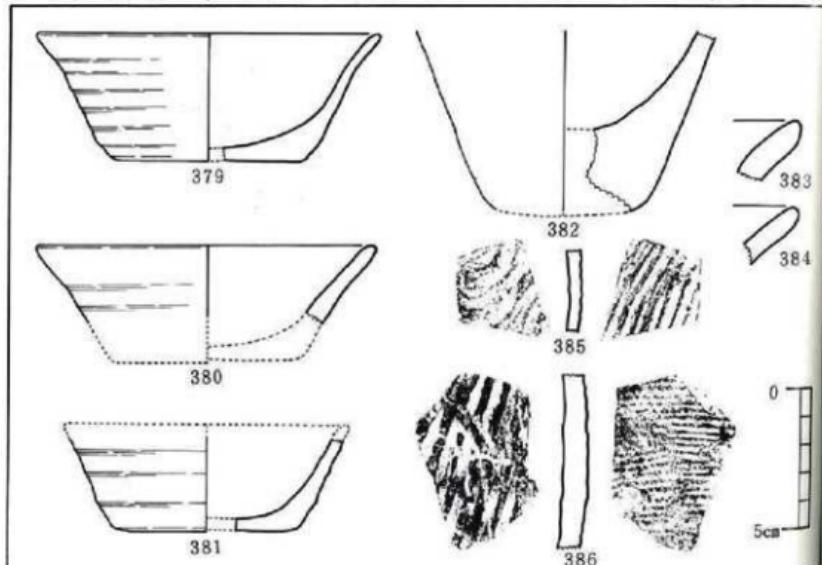
内和遺跡の層位は、遺跡地ほぼ中央3—B区トレーニングにおいて深掘りを行った。その結果、下記のような層序となった。Ⅲ層以下は、遺物遺構ともに確認されていない。

- I層： 灰褐色を呈した耕作上で、層の厚さは約20cm程度である。
- II層： 黒色を呈した火山灰であり、土師器・須恵器が包含されている。層の厚さは、約10cmである。この層は、下剥離遺跡でみられたII層とは若干異なる色調及び土質を示す。
- III層： 黄褐色を呈し、下剥離遺跡同様a, b, cに区別され、層の厚さは、それぞれ、約10・20・30cmぐらいである。
- IV層： 灰褐色を呈した粘土層である。遺物は包含されていない。層の厚さは、約15cm程度である。
- V層： 黑褐色粘質土層である。層の厚さは、約20cm程である。
- VI層： 桃白色を呈した砂質状の土層で、下位へ続いている。

第2節 遺構・遺物

遺構

内和遺跡の遺構は、II層下部にⅢ層を掘り込んだ柱穴が検出されている。柱穴は、径20~25



第58図 内和遺跡出土遺物 ($S = \frac{1}{2}$)

cm程度のもので、深さは、15cm程と浅い。トレンチ内での確認のため、建物として並列するものはみられなかった。

遺物

内和遺跡の遺物は、土師器と須恵器が出土している。

379～384は、土師器破片である。土師器には、壺（379～381）と壺底部（382）、壺口縁部破片（283・284）である。

379は、壺型土器で、口径20cm、高さ4.5cm、底部6.5cmを計る。器面は、水引き状の整形がよくみられ、底部はヘラ起しである。380・381も同手法が見られる。色調は、灰黄色を呈する。

382は、底部破片である。色調は褐色を呈し、粗雑な作りが見られる。

383・384は、壺の口縁破片と推定される。器形は、外反し壺部は、外反し端部は丸く終る。器面は刷毛状の整形がみられ、赤褐色に近い。

285・286は、須恵器破片である。いずれも、内面は、縦位の圧痕が施され、外面には、縦位のタタキ目整形が施されている。

第3節 まとめ

内和遺跡においては、耕作上直下のⅡ層に黒色土より若干明るい土層が所在し、須恵器・土師器を包含している。この須恵器・土師器包含層は、他の3遺跡にはみられない。この須恵器・土師器の包含層は、確認調査の結果、2—A区～5—B区の範囲にみられ、同層を流入する柱穴が多数検出されている。この柱穴群は、建物等の存在が想定されるものである。

この結果をもとに熊毛支庁と協議を重ねたところ、本工事区については盛土工法による圃場整備が可能とのことである。

そこで内和遺跡については、遺跡の範囲などを明確にしたうえ、60cm余の盛土を行うことで計画変更し処理した。

あとがき

赤木・下剥峯・大四郎・内和遺跡の発掘調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。発掘調査は、弥生時代から縄文時代の3時期（文化）に渡るものであった。特に、鬼界カルデラの火山灰層（アカホヤ）下の貝殻文系土器の発見は、今後増加するとは考えられるが種子島においては初見であった。また、アカホヤ層直上の縄文式土器は、本土縄文式土器との対比検討において、種子島の縄文式土器研究および縄文文化研究に大きく寄与するものであろう。

以上のように、多くの資料や成果をもたらしたと同時に今後に多くの課題を残した。短い整理期間では、これらの問題点を提起し解決しつくすことはできなかったため資料に具するようなるべく図化することに努めた。

発掘調査後の整理作業においては、県文化課重富収蔵庫において1月末以来、水洗注記・復元・実測等に多くの人の協力があった。感謝の意を表したい。

（新東・立神）

県営ほ場整備事業（現和地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査

赤木 遺跡

下剥峯 遺跡

大四郎 遺跡

内和 遺跡

発行日 昭和53年3月20日

発 行 西之表市教育委員会 〒891-31 西之表市中目

印 刷 所 朝日印刷所

図 版

◎ 本版圖書

一書籍

一書籍

一書籍

一書籍

一書籍

不適切書

不適切

「本版圖書」の「本」を「本版」に



①赤木遺跡遠景

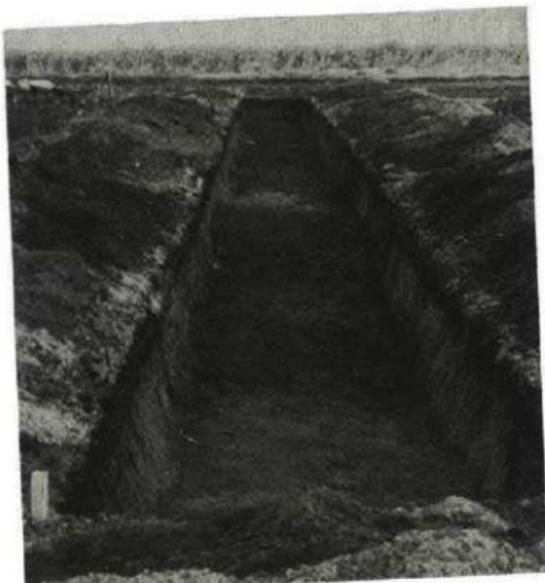


②赤木遺跡層位

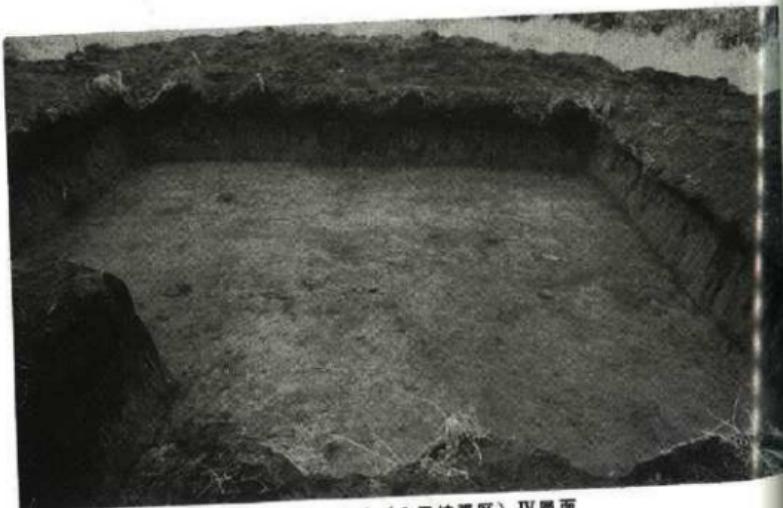
—IV層



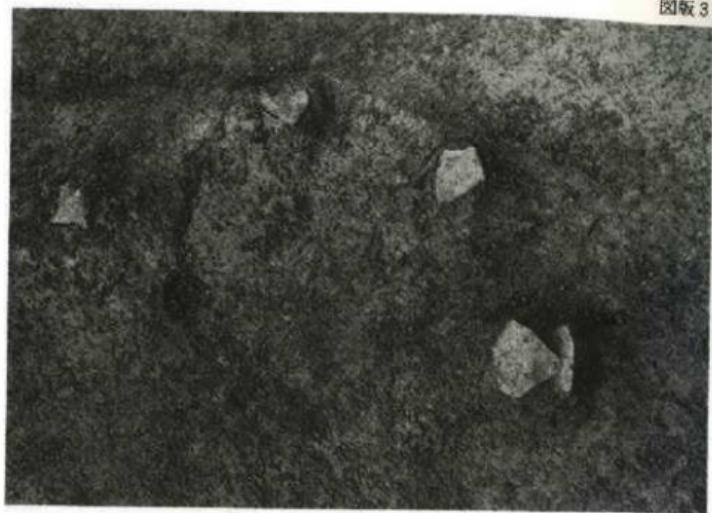
③赤木遺跡 (3・4・5トレンチ)



①赤木遺跡（1トレンチ）



②赤木遺跡（5T拡張区）IV層面



① 5 T 括弧区 IV 层土器出土状态



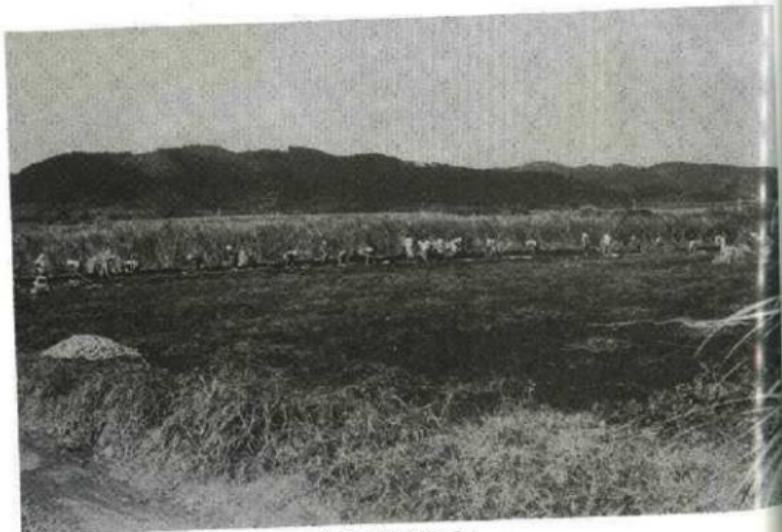
② 赤木造跡出土遺物 (59)



圖版 4



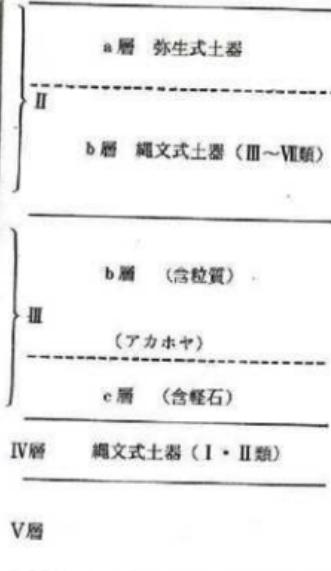
①下刺峯遺跡遠景



②下刺峯遺跡近景



①下利峯遺跡 確認調査風景



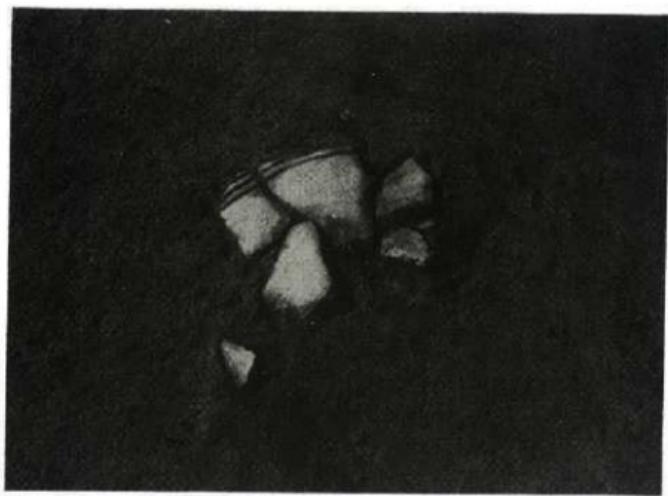
図版 6



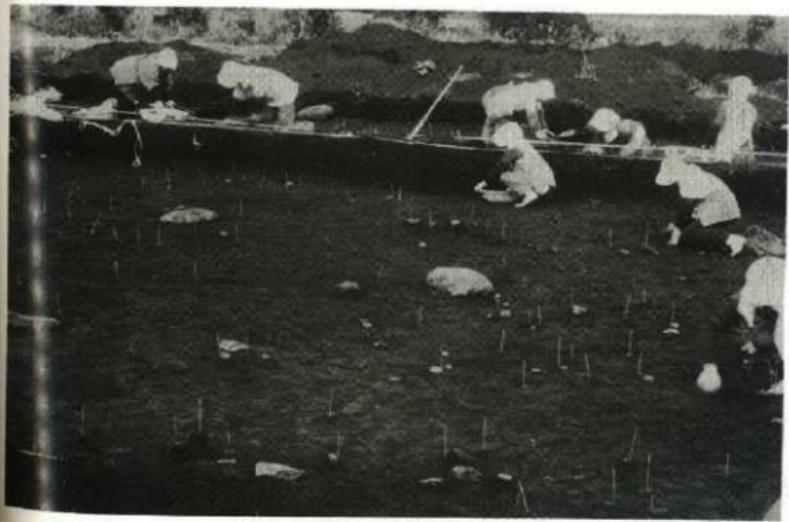
① IIa 唐
弥生式土器出土状態



② 弥生式土器出土状態（壹）



①弥生式土器出土状態（甕）

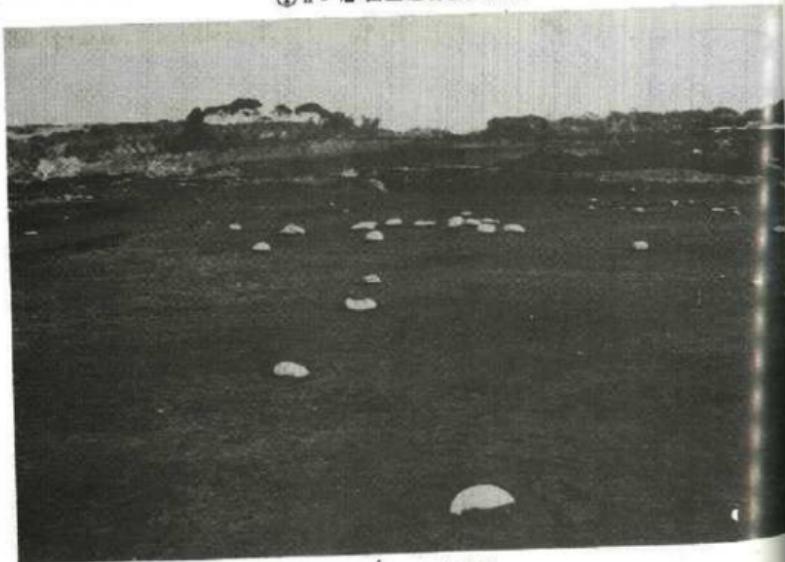


②II b 層 遺構遺物検出風景

図版 8



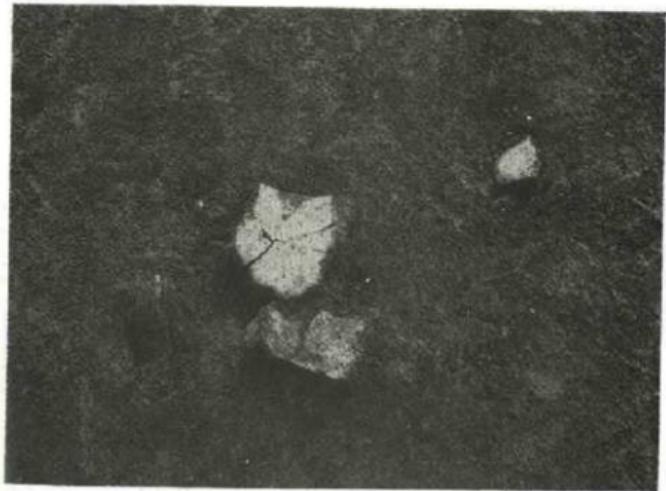
① II b 層 出土遺物検出状態



② II b 層 検出状態遠景



① IV層 挖出状態遠景

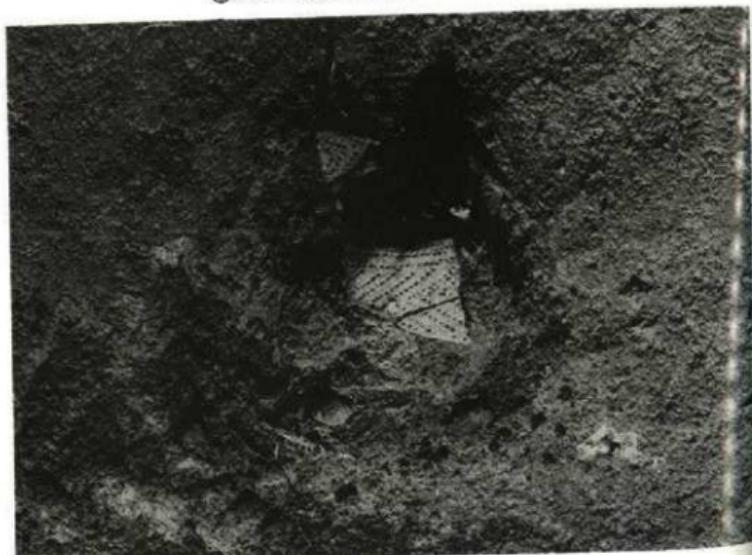


② IV層 土器出土状態 (114 土器)

図版10



①IV層 土器出土状態（146土器）



②IV層 土器出土状態（157土器）



①集石 I 検出状態



②集石 II 検出状態



① I 頸土器（左: 60, 右: 61）



② II 頸土器 (114)



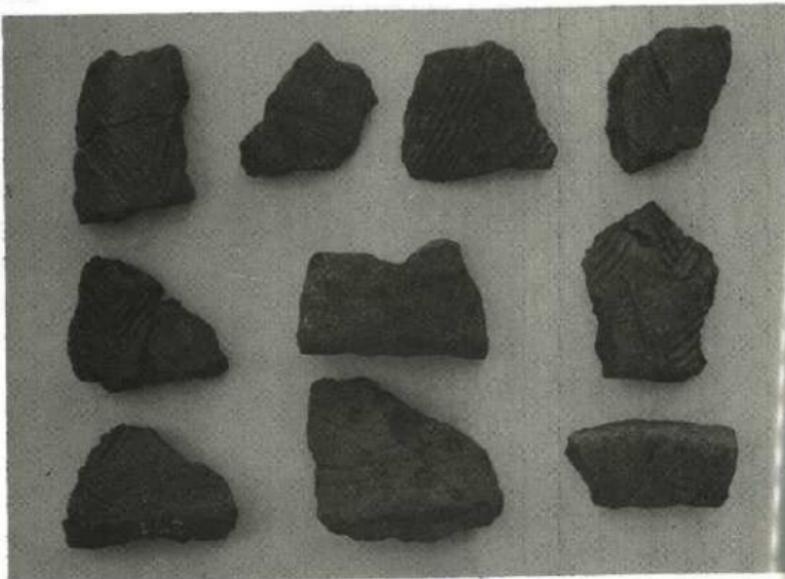
114 土器の施文



① II a 類土器 (62~71配列実測図と同じ)



② II a 類土器 (75~81・同)



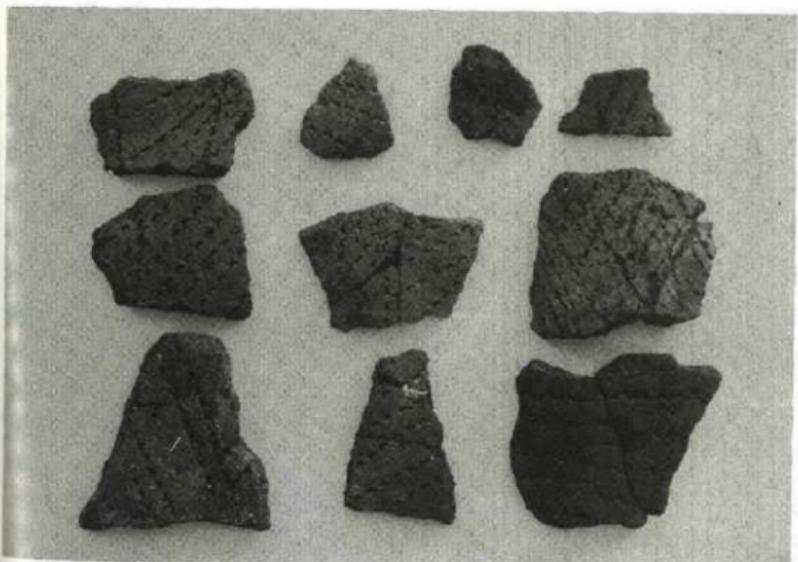
① II a 類土器 (102~111・同)



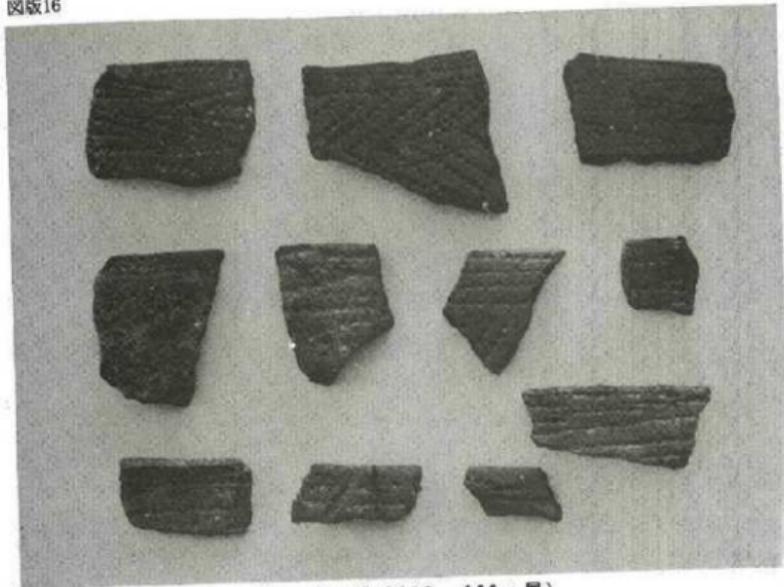
② II a 類土器 (112)



① II b 類土器 (115 ~ 126・配列は実測図に同じ)



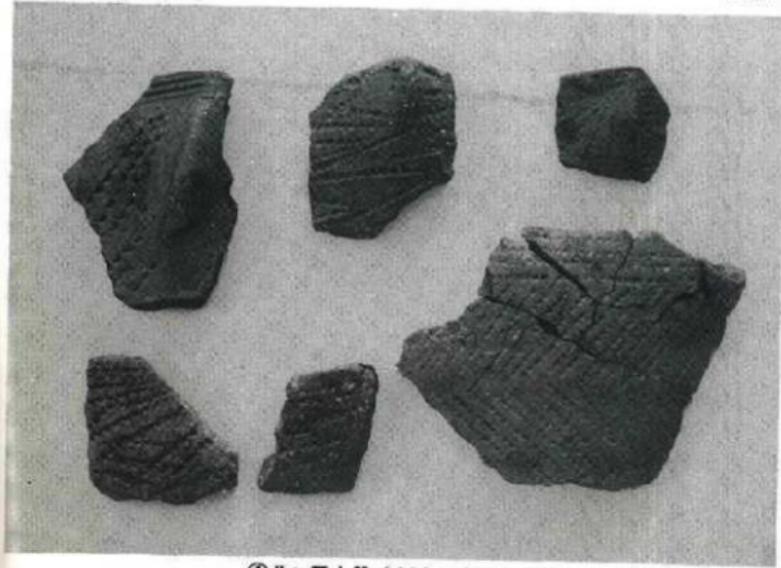
② II b 類土器 (127 ~ 136・同)



① IIc 類土器 (156~166・同)



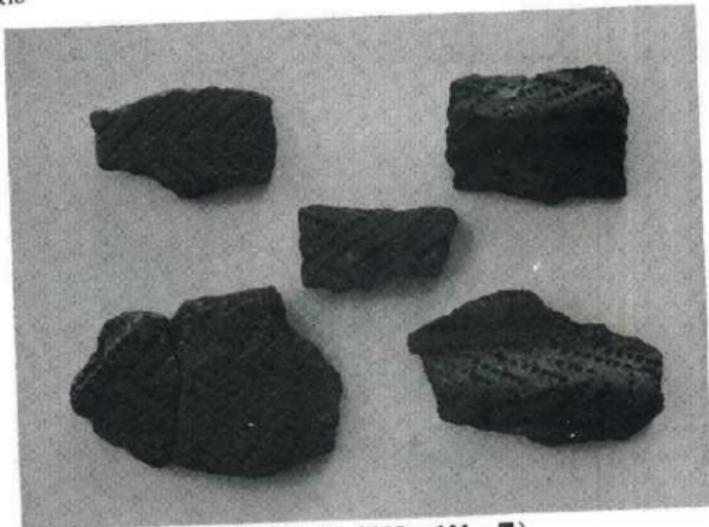
② IIc 類土器 (167~176・同)



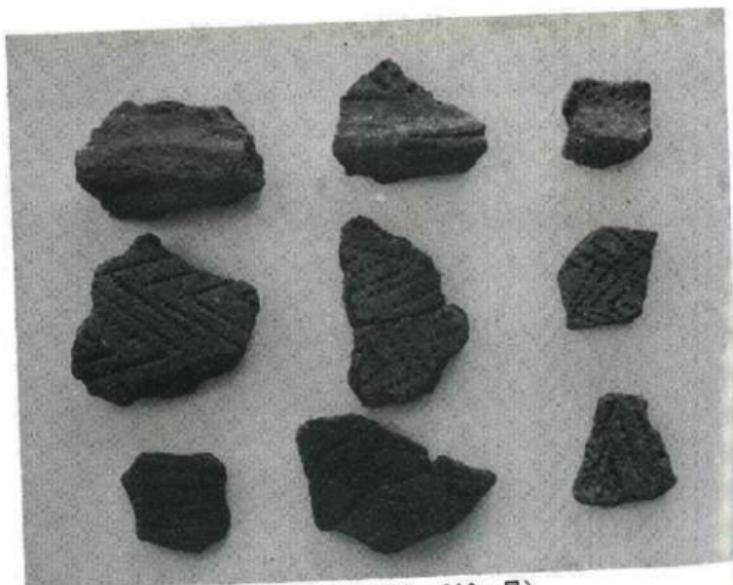
① IIc 類土器 (150 ~ 155 · 同)



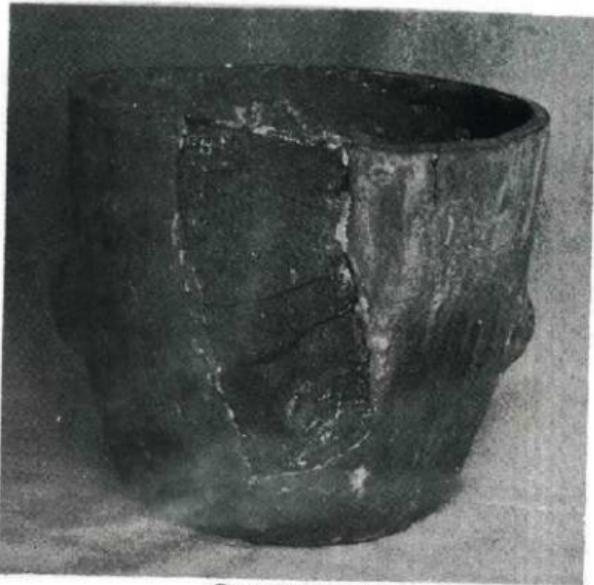
② IIc 類土器 (182 ~ 194 · 同)



① IIc 類土器 (177 ~ 181・同)



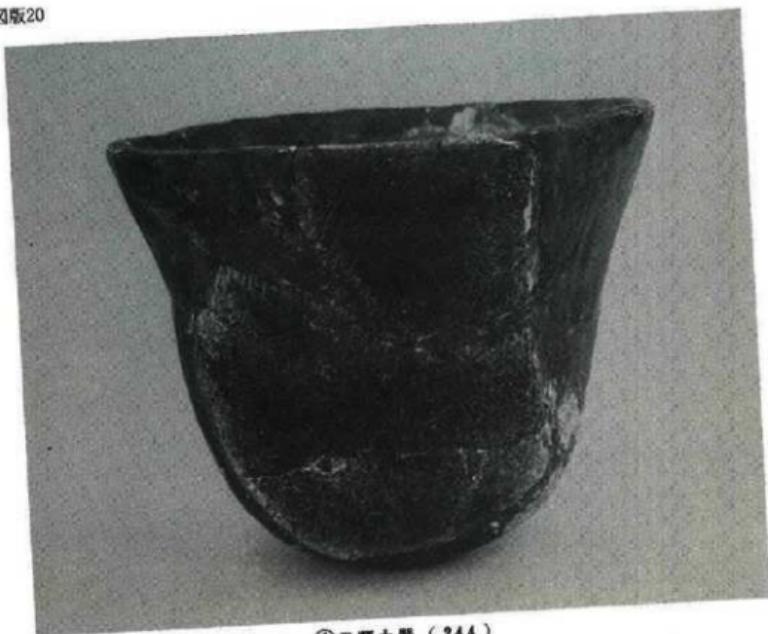
② IIc 類土器 (210 ~ 219・同)



① II c 陶土器 (149)



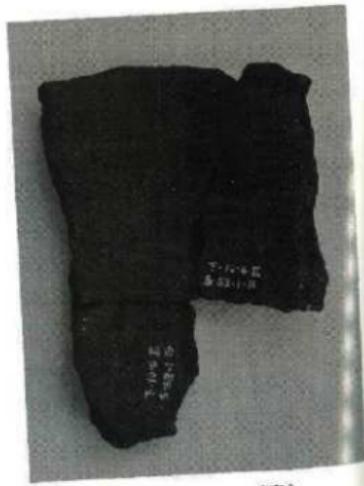
② II c 陶土器 (238)



① IV 類土器 (244)

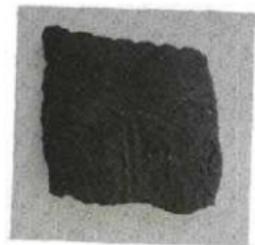


(裏)



(表)

② IV 類土器 (245)

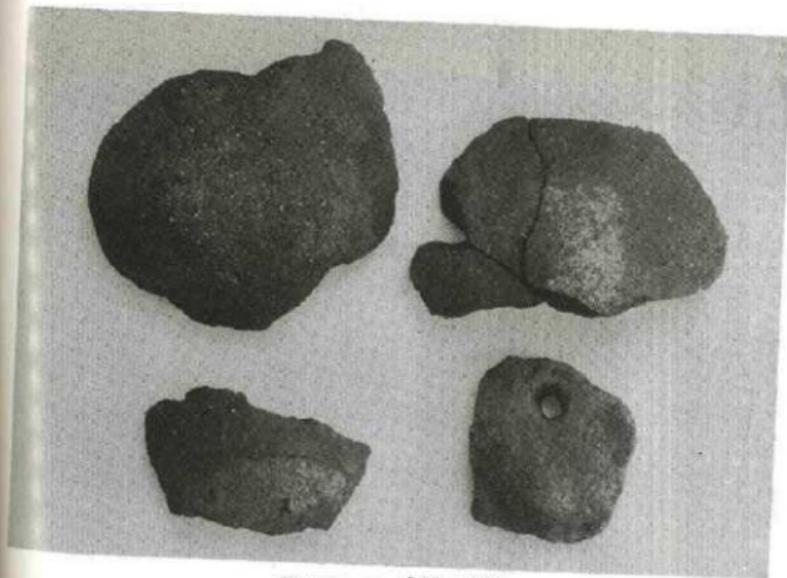


(表)



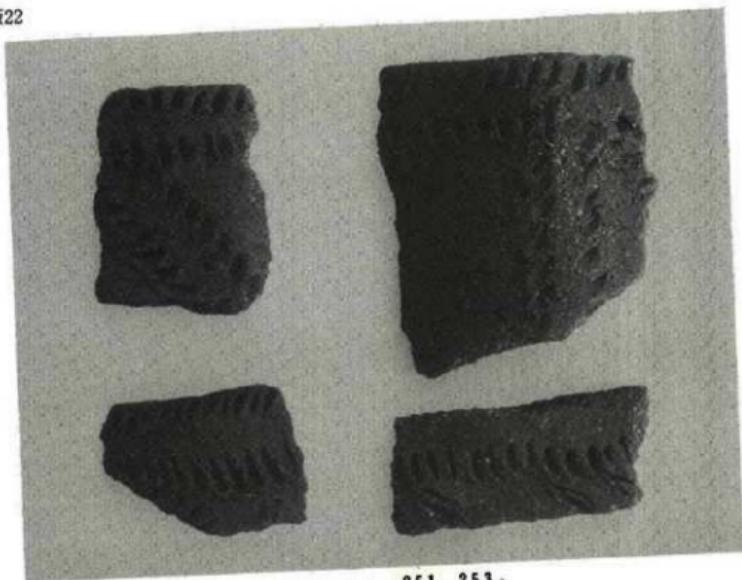
(裏)

①Ⅲ類土器 (246)



②Ⅳ類土器 (247, 248)
250, 249

図版22



①IV類土器 (251, 253)
252, 254)



②IV類土器 (257 ~ 261 · 配列は実測図に同じ)



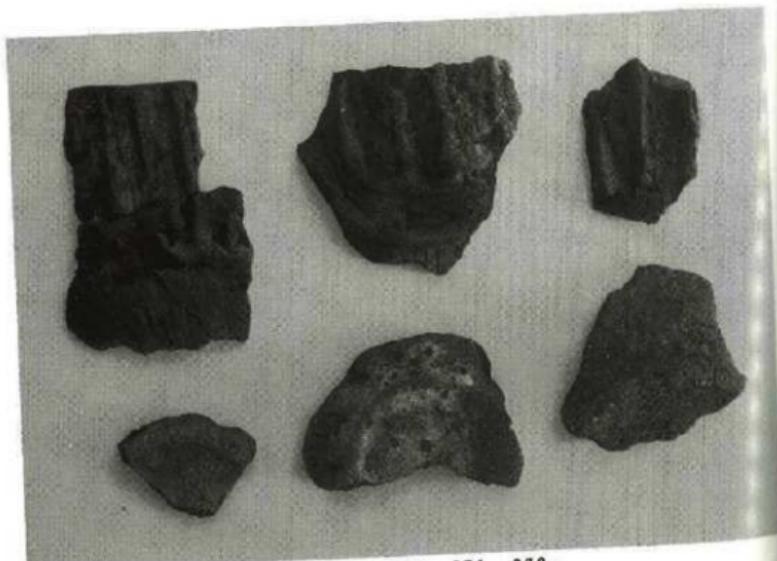
①V類土器（263の推定復元）



②263土器の文様旋文



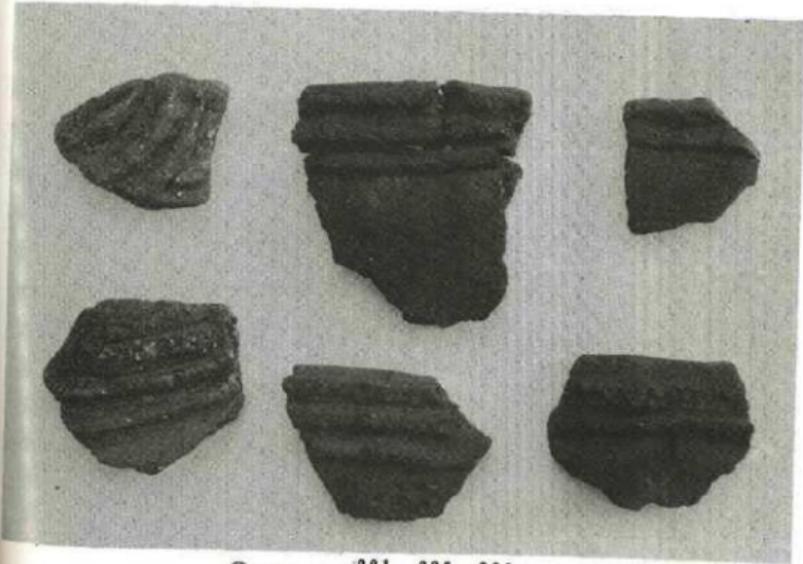
① VI類土器 (264 265 266)
267 268 269)



② VI類土器 (270 271 272)
273 274 275)



① VI類土器 (277 278
279 280)

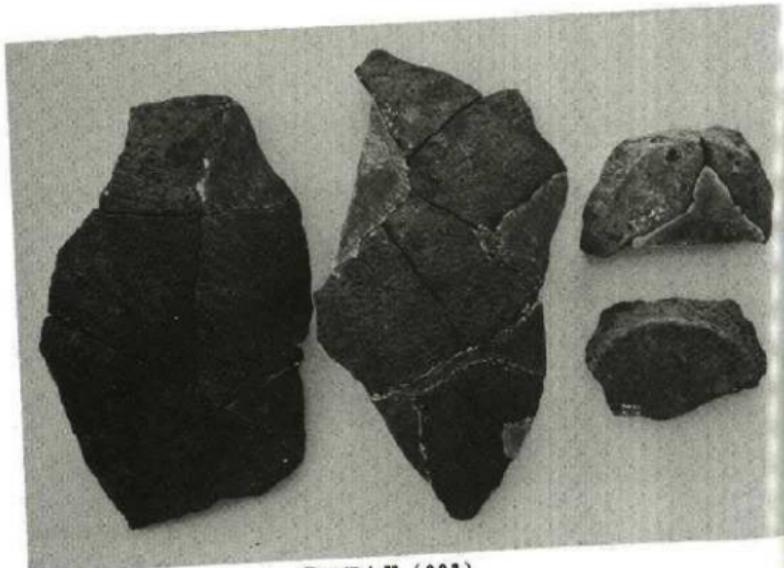


② VI類土器 (281 285 288
282 287 289)

图版26



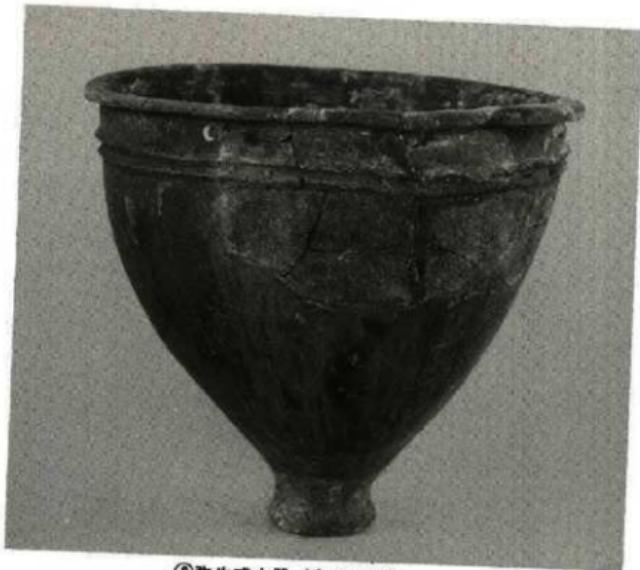
① VI類土器 (285 290)



② VII類土器 (293)



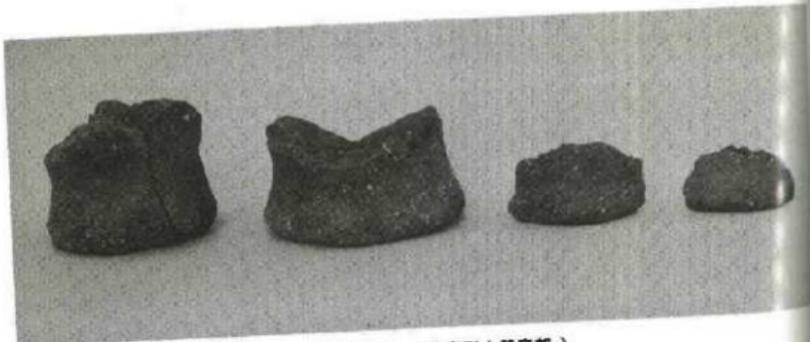
①弥生式土器（変形土器）



②弥生式土器（変形土器）



①弥生式土器（壺形土器）

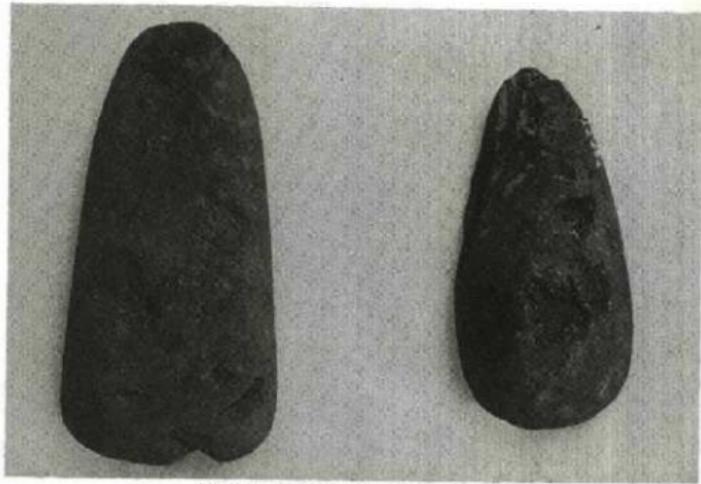


②弥生式土器（壺形土器底部）



(表) ①IV層出土の石器 (243)

(裏)



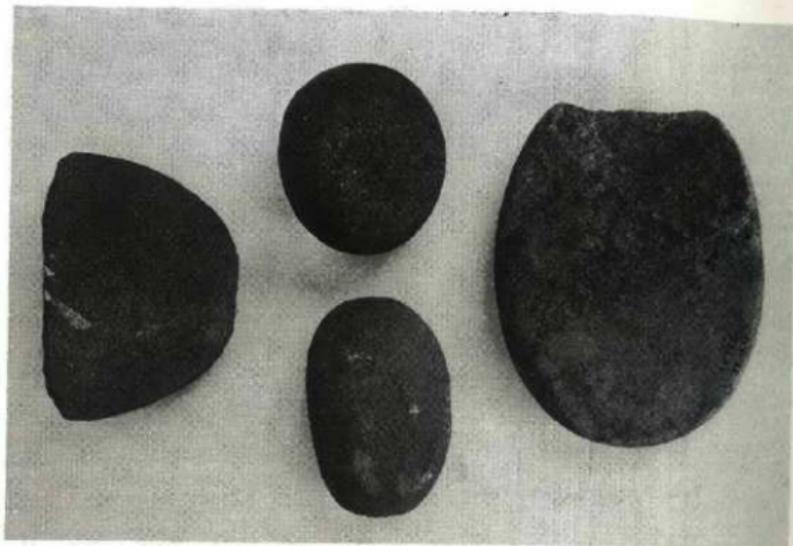
②IIb層出土の石器 (294 295)



① II b 層出土の石器 (296 297 298)



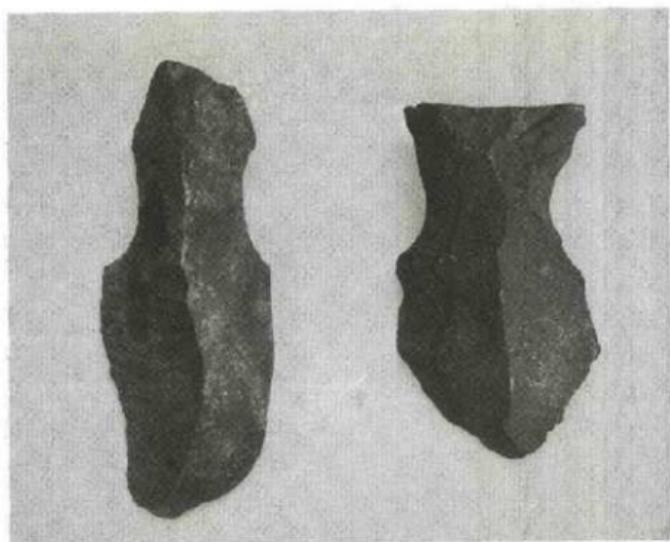
② II b 層出土の石器 (299 300 301)



① II b 層出土の石器 (302 303 304 305)

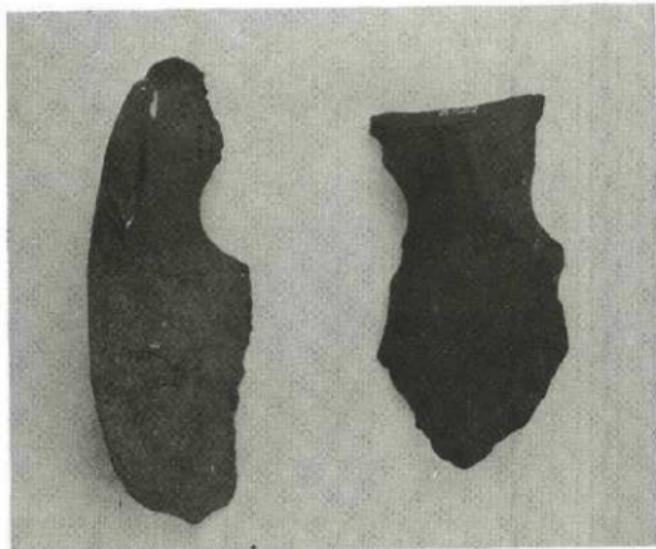


② II a 層出土の石器 (374 375 376)



377

378



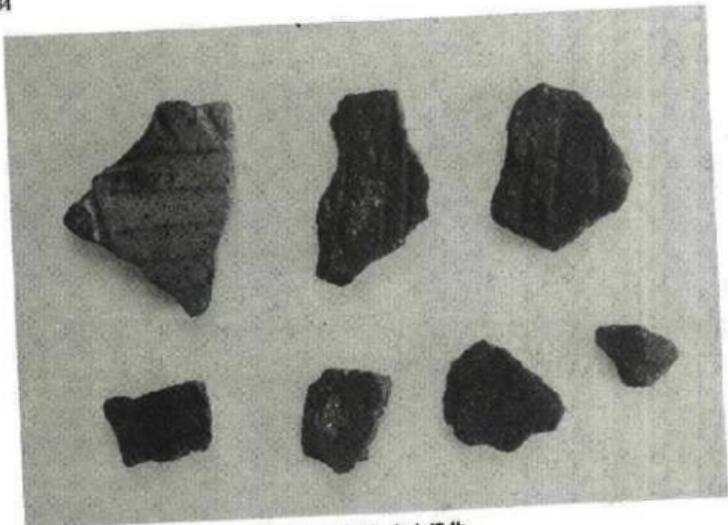
II a 屢出土の石器（上：表・下：裏）



①大四郎遺跡遠景



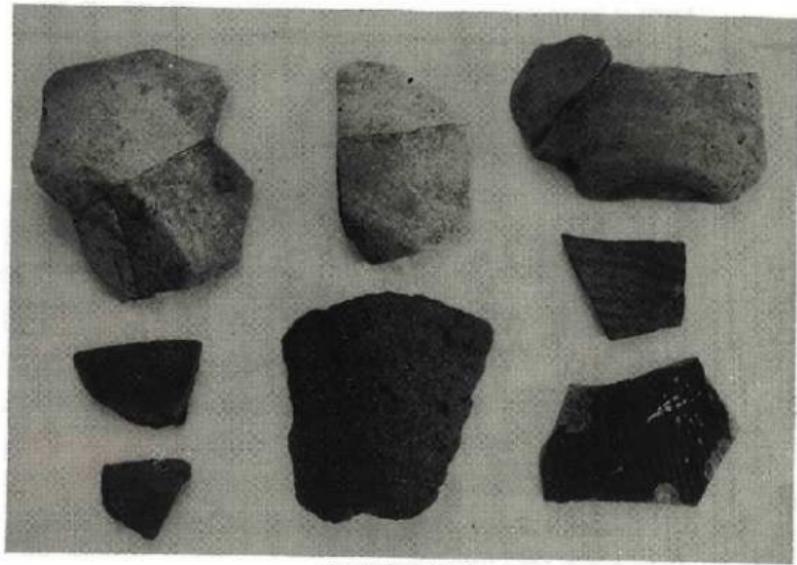
②大四郎遺跡拡張区調査風景



①大四郎遺跡 出土遺物



②内和遺跡全景



內和遺跡出土遺物